第一小学校々地内漆町遺跡
発掘調査報告書

1987年3月

石川県小松市教育委員会

第一小学校々地内漆町遺跡
発掘調査報告書

1987年3月

石川県小松市教育委員会

例　　言

1．本書は、小松市教育委員会が、小松市白江町ハ－73番地所在小松市立第一小学校における講堂防音改築工事及びプール新設工事に先立って実施した、校地内漆町遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査期間及び調査面積

試掘調査	（講堂及びプール予定地）		昭和59年12月17日・18日
第１次調査	（講堂改築）	1,570㎡	昭和60年３月15日～６月15日
第２次調査	（プール新設）	1,060㎡	昭和61年３月10日～５月22日

3．調査担当等

（調査担当）　試掘調査　望月精司（社会教育課文化係主事）
　　第１次調査　樫田　誠（　同　上　）
　　第２次調査　宮下幸夫（　同　上　）

（事務局）　小松市教育委員会　教育長　岡山丞彦
　　社会教育課　課長　吉中圭児　　課長補佐　谷口征洋
　　文化係長　小村　茂

4．出土品整理

（整理室担当）社会教育課　課長補佐（埋文担当）　松原誠一　（Ｓ60．４～）
　　主　査（　〃　）　荒木和浩　（　〃　）

（遺物の洗浄・注記・復元）　打田外喜代、玉尾真佐子

（遺物の実測）　宮田佐和子

5．報告書作成

遺構・遺物のトレース、図版の作成は、石田和彦・江野直子・宮田佐和子の協力を得て樫田が担当した。

本書の執筆は、Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ－１・２・３－(1)，Ⅳを樫田が、Ⅲ－３－(2)を望月が、Ⅲ－３－(3)を宮下が行った。また、土器観察表は、(1)を宮田が、(2)を望月が担当した。

編集は、文化係長小村茂の指導のもと、樫田が行った。

6．発掘調査及び報告書作成にあたり、下記の方々の御協力・御指導を得た。（敬称略）

上野与一、北野博司、小嶋芳孝、桜井甚一、諏訪間順、田嶋明人、堤　隆、出越茂和、橋本澄夫、久生秀樹、久田正弘、藤井明夫、松本富雄、湯尻修平、矢ヶ崎孝雄、小松市立第一小学校、石川県立埋蔵文化財センター、小松建設株式会社

目　　次

Ⅰ　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 1

Ⅱ　調査の概要

1　調査に至る経緯 …… 2

2　調査経過の概要 …… 3

Ⅲ　遺構・遺物

1　調査区の概要 …… 6

2　遺　　構 …… 7

(1) 掘立柱建物跡　(2) 溝状遺構　(3) 土　坑

(4) 竪穴状遺構　(5) 井　戸

3　遺　　物

(1) 弥生時代末～古墳時代前期の遺物 …… 22

土器観察表 ① …… 29

(2) 古墳時代後期～平安時代の遺物 …… 32

(3) 中世以降の遺物 …… 34

土器観察表 ② …… 43

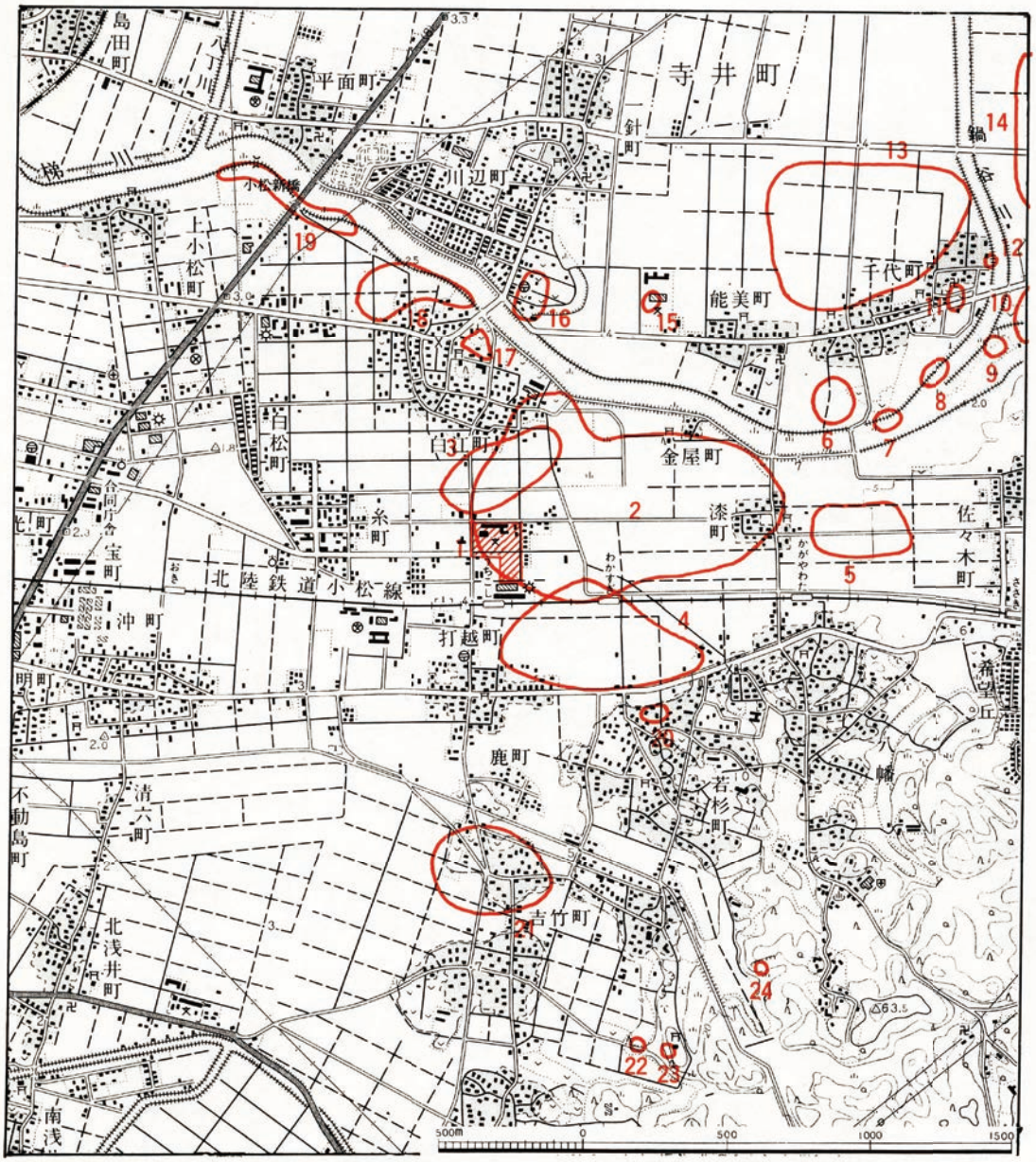
Ⅳ　ま と め …… 47

挿　図　目　次

第１小学校地内漆町遺跡と周辺の遺跡　1
第１図　調査区位置図 …… 2
第２図　グリッド配置図 …… 4
第３図　第２次調査区遺構全体図 …… 4
第４図　第１次調査区遺構全体図 …… 5
第５図　調査区土層断面図 …… 6
第６図　１号掘立柱建物跡 …… 7
第７図　２号掘立柱建物跡 …… 8
第８図　３号掘立柱建物跡 …… 8
第９図　４号掘立柱建物跡 …… 9
第10図　５号掘立柱建物跡 …… 9
第11図　６号掘立柱建物跡 …… 10
第12図　７号掘立柱建物跡 …… 10
第13図　８号・９号掘立柱穴礎板 …… 11
第14図　柱穴第４ブロック …… 11
第15図　８号・９号掘立柱建物跡 …… 12
第16図　溝状遺構土層断面図 …… 16
第17図　10－２号溝土層断面図 …… 17
第18図　１号土坑 …… 17
第19図　１号井戸 …… 17
第20図　環状溝を持つ建物 …… 19
第21図　方形周溝状遺構土層断面図 …… 20
第22図　方形周溝状遺構と８号・９号掘立 …… 21
第23図　方形周溝状遺構出土石鏃 …… 23
第24図　須恵器接合・グリッド別出土点数概念図 …… 23
第25図　３号ｂ－ｄ溝出土遺物実測図 …… 24
第26図　３号ａ溝・10号溝出土遺物実測図 …… 25
第27図　10－２号溝出土遺物実測図 …… 26
第28図　方形周溝状遺構出土遺物実測図 …… 27
第29図　方形周溝状遺構出土遺物実測図 …… 28
第30図　ピット・井戸出土土器及び包含層出土須恵器実測図 …… 35
第31図　包含層出土須恵器実測図 …… 36
第32図　包含層出土須恵器実測図 …… 37
第33図　包含層出土須恵器実測図 …… 38
第34図　包含層出土須恵器実測図 …… 39
第35図　包含層出土須恵器・土師器・灰釉陶器・瓦実測図 …… 40
第36図　包含層出土須恵器・中世以降遺物実測図 …… 41
第37図　包含層出土中世以降遺物実測図 …… 42

発掘調査参加者

（白江町）大倉正治、加藤久太郎、小島玲子、坂下義男、佐藤ナナヲ、田原喜代美、茶谷秀樹、畠山たま、村田喜作、山崎一雄、（漆町）河南敏子、細川ツルエ、宮越アイ子、村中敏昭、村中初枝、（荒木田町）西木戸久男、山田茂、（金屋町）田中清次郎、牧野ミヨ、（打越町）北田圭子、重田栄一、（千木野町）岡本歳雄、山口義隆、（千代町）広島キヨ子、（原町）岡田幸子、山口あきみ、（平面町）岡田芳子、（園町）中田正二、（若杉町）林進一、（扇町）浅井正二、（軽海町）高橋定吉、（南浅井町）入口すず子、（八幡町）古谷すみ、松本清詞、（観音下町）川岸武雄、（埴田町）元雄夏子、（浜佐美町）山田金次郎、山田キミエ、（日末町）松原修一、（上本折町）中道哲也、（大領中町）山佐聡、（沖町）江野直子、（松任町）宮田佐和子、小松建設株式会社



1.第一小学校々地内漆町遺跡　2.漆町遺跡（弥生～近世）　3.白江念仏寺塔遺跡（弥生～中世）　4.打越遺跡(弥生～中世)　5.佐々木遺跡(弥生～中世)　6.千代マエダ遺跡(古墳～平安)　7.本村遺跡(古墳)　8.横地遺跡(縄文)　9.フトンド遺跡(平安)　10.古府遺跡(弥生～中世)　11.千代城跡(室町)　12.小野町遺跡(古墳)　13.千代オオキダ遺跡(奈良～中世)　14.しのまち遺跡（平安）　15.定地坊跡(室町)　16.一針遺跡(縄文)　17.白江堡跡(室町)　18.白江梯川遺跡（古墳～中世）　19.平面梯川遺跡(弥生)　20.若杉古窯跡(江戸)　21.吉竹遺跡(古墳～中世)　22.幡生１号古墳(古墳)　23.釜谷古墳(古墳)　24.若杉オソボ山１号窯跡(古墳後期)

Ⅰ　遺跡の位置と周辺の遺跡

梯川は、その上流において郷谷川・大杉谷川を介して白山山系大日連峰を源とする、県下でも手取川に次ぐ規模をもつ一級河川である。能美・江沼丘陵の一角を占める小松市東部丘陵地を左岸に擁し、右岸にひろがる能美・江沼山地とを区画、縦断するかたちで北流する。滓上川と合流する軽海・遊泉寺付近で流れをほぼ90度変えて西流し、また、能美丘陵南端を西流してきた鍋谷川は、千代町出村付近で南に流れを変えて梯川に合流、広大な水田地帯を経て日本海にそそいでいる。梯川中流域一帯にひろがる沖積平野は、農用適地として重要な穀倉地を形成しているが、一方、梯川の緩流と蛇行による氾濫の記録も多い。従って、一帯の旧地形は、氾濫による土砂推積、浸食、自然提防の形成等のくりかえしにより、かなり複雑な様相を呈しているものと思われる。

この流域は石川県内でも特に多くの遺跡が集中する地域で、梯川を利用した水運の便と豊かな農用適地をかかえて成立した弥生時代から中世にいたるまでの大規模な集落跡が発見されている。また、梯川の氾濫等に伴う地形の変遷の歴史も、遺跡の分布を広範なものとしている原因であろう。主要な遺跡としては、梯川中流域右岸古府町付近の洪積台地上に平安時代を中心とした、古府シマ遺跡・十九堂山遺跡等の遺跡群が存在し、加賀国政治の要所「加賀国府」や「加賀国分寺」の有力な推定地となっている。また、沖積低地に埋没している微高地上にも数多くの遺跡が確認されており、漆町遺跡や白江念仏寺塔遺跡・千代遺跡・打越遺跡等、広大な範囲を包括する弥生時代末からの複合大規模遺跡が形成されている。これら流域の低地遺跡は、地形的変遷や各期の盛衰に複雑に絡み合ったかたちでの細分が当然予想され、その実態は、昭和54年頃から本格化した公害防除特別土地改良事業（カドミ対策）や広域圃場整備に伴う大規模発掘によって、多大な成果をもって明らかにされつつある。

さて、本遺跡は、漆町遺跡の西端部に位置する小松市立第一小学校々地内に存する。漆町遺跡は、漆町・金屋町・白江町・若杉町の４町にまたがる広大な複合集落遺跡で、弥生時代から中世近世にまで至る多量の遺構・遺物分布が、これまでの公特関連調査により確認されており、その成果の一部が公表されている（石川県埋文　1986）。微視的には、複数遺跡（集落）の包括的総称である面もあり、本遺跡も漆町遺跡の中にあって、一つのブロックの一部を構成するものとして把握される。本遺跡の西部地域は殆んど遺物の散布もなくなり、一応漆町遺跡群の西端部付近に位置するものとしても捉えられようか。ただし、梯川に接する地域では、漆町遺跡に連続するかたちで、白江梯川遺跡・平面梯川遺跡・梯川鉄橋遺跡等が帯状に西へ連なるあり方を示している。いずれも弥生時代中～後期にあたり、この地域でもやや古相に属する遺跡で、また、国鉄小松駅に東接して、弥生中期小松式の標式遺跡となった八日市地方遺跡もあり、地形的要素によっては、市街地付近における当該期遺跡の存在も充分考慮しなければならないであろう。

Ⅱ　調査の概要

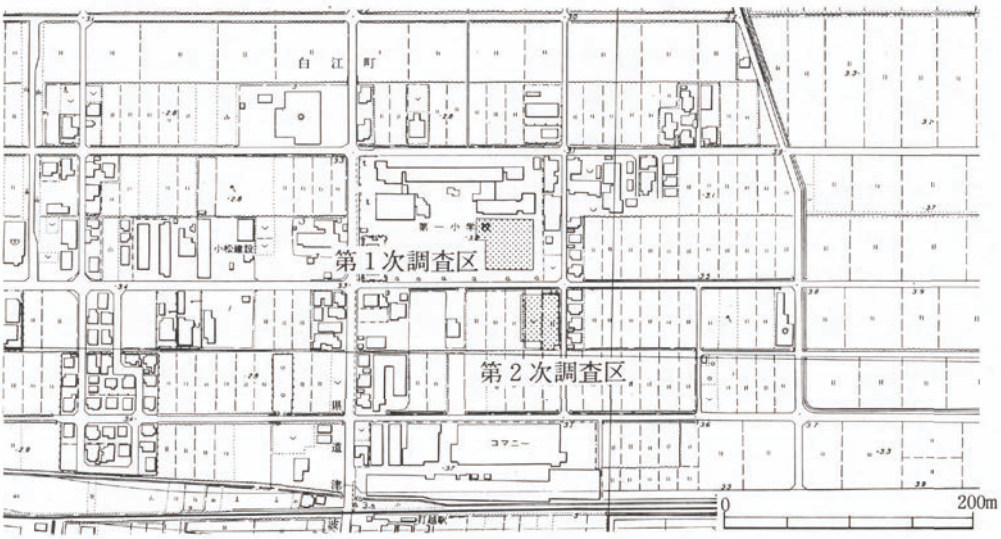
1　調査に至る経緯

昭和59年10月、小松市立第一小学校の講堂兼体育館及びプールの学校敷地内改築移転計画が策定され、本敷地内の埋蔵文化財の有無について教育委員会庶務課より照会があった。本校は、漆町遺跡の西端部にあたり、周知の埋蔵文化財包蔵地となっていたが、講堂建設予定地がグラウンド内ということもあり、踏査による確認が不可能な状況で、位置的に遺跡存在の確実性が懸念されるものとなった。そのため、昭和59年12月17日・18日両日にわたり、トレンチによる確認作業を実施した。その結果、工事予定地のほぼ全面にわたって古墳時代初頭～平安時代の遺物を検出し、第一小学校々地内漆町遺跡として事前緊急発掘調査の実施を決定するに至った。

事業は講堂建設とプール建設とに分離され、昭和60年度事業として、防衛庁「教育施設等騒音防止対策事業」及び文部省「公立学校屋内運動場の新増築事業」の補助金とによる「講堂防音改築工事」の実施を決定、工事着工を昭和60年６月とした。講堂部分の調査必要面積が約1600㎡近くあり、新年度をまって調査を開始することは、工事着工の遅延を招く恐れがあったため、昭和60年３月10日から年度をまたがり調査を実施することとなった。また、プールの建設については昭和61年度事業として、文部省「公立学校施設整備費補助金（学校体育施設補助）」による「プール新設工事」が実施されることになり、昭和61年５月下旬工事着工が計画された。本事業に関しても、夏期プール開きという行事をひかえており、工事の遅延は許されない状況にあって、前年度同様に３月調査着手という結果となった。

調査費は、昭和60年度講堂防音改築工事についてのみ、文部省補助対象面積に関し一部補助金の割当てを得た他は、報告書作成を包めて市単事業として実施した。

本書では、講堂部分の調査を第１次調査、プール部分の調査を第２次調査として記述してゆく。



第１図　調査区位置図

2　調査経過の概要

（第１次調査）　昭和60年３月10日～同年６月15日。調査面積 1,570㎡。

建設地が運動場内に設定されたため、盛砂の除去作業を要した。このことにより、調査区が周囲より１ｍ以上の深度をもつかたちとなり、安全管理面、特に冠水時等にかなり神経をつかった。また、調査区外壁を成す盛砂の崩壊も、調査区内排水面で支障となることもしばしばであった。

◯調査日誌抄

３月10日～14日　重機による運動場盛砂除去及び遊戯施設撤去作業。

３月13日　作業員作業開始。調査区内排水溝掘りと並行して調査区内杭打ち（４ｍメッシュ）。

３月14日　全体をⅠ～Ⅵ・Ⅱ′・Ⅲ′・Ⅵ′の計９区に区分し、Ⅰ区より掘り下げを開始する。

３月25日　１号溝検出。北東コーナー付近で大溝プランが検出されはじめる。

４月９日　Ⅰ・Ⅱ区遺構プラン確認完了。大溝は３号ａ溝とｂ溝とに分離して把握する。
Ⅱ区で掘立柱列群を検出するが、重複著しく棟数は不明のまま。

４月18日　Ⅲ～Ⅵ区遺構プラン確認完了。Ⅴ区で掘立柱建物跡２棟確認。

４月25日　第一小学校６年生社会科授業で調査見学。

５月２日　方形周溝状の遺構プランを検出。３号ｂ溝上層より匂玉出土。

５月27日　10号溝完掘。１号井戸を検出し掘り下げる。未掘ピット等の完掘にとりかかる。

６月１日　全面の精査、最終確認作業。

６月11日　全区清掃、写真撮影を行い作業員の作業を終了する。器材洗浄。

６月12日　溝状遺構等平板実測。レベリング作業。

６月15日　発掘調査終了。

（第２次調査）　昭和61年３月10日～同年５月22日　調査面積 1,060㎡

第１次調査区の南に位置し、農道をはさんで連続する。現況は水田及び一部宅地として盛砂された部分にかかっていた。

◯調査日誌抄

３月10日　器材運搬。重機による盛砂除去。

３月11日　作業員作業開始。調査区内排水溝掘り。調査区内に盛砂の一部が予想以上に残存しており、人力による除去作業が必要となる。

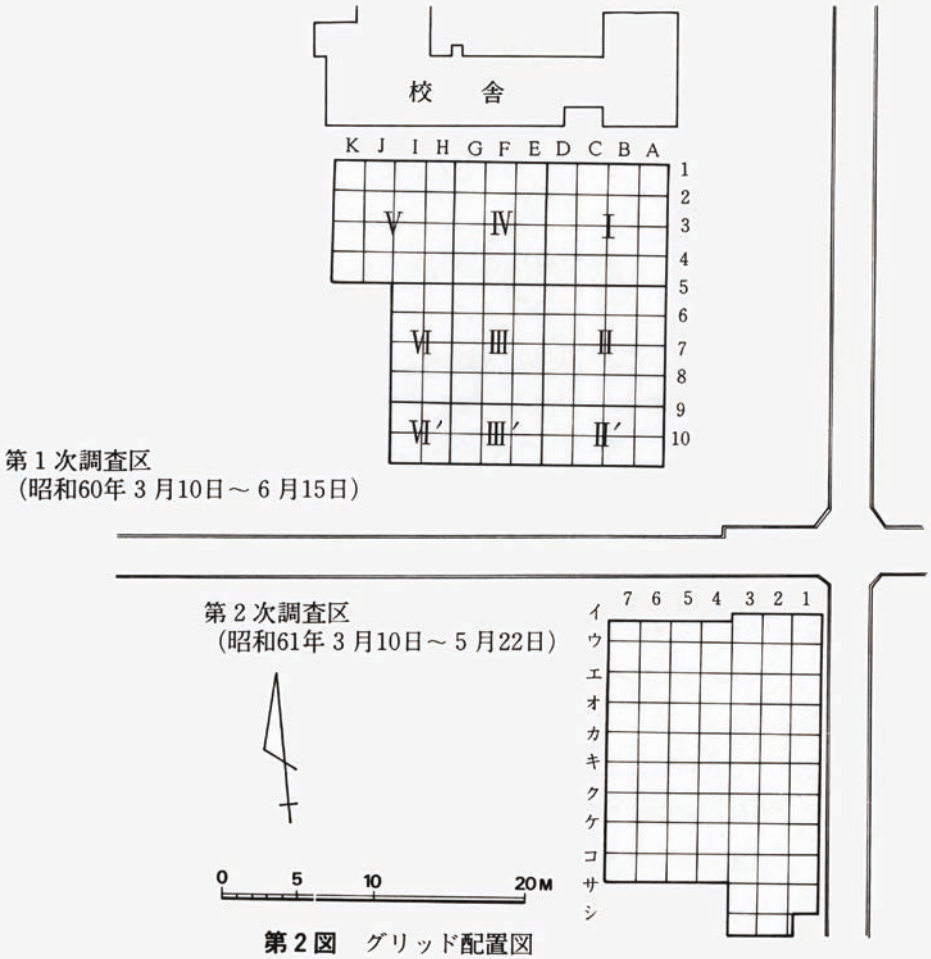
３月29日　ようやく盛砂、攪乱土（宅地擁壁工に伴うもの）の除去を終了し、調査区掘り下げに入る。

４月12日　溝状遺構検出。１次調査の10号溝との連続性が予想された。

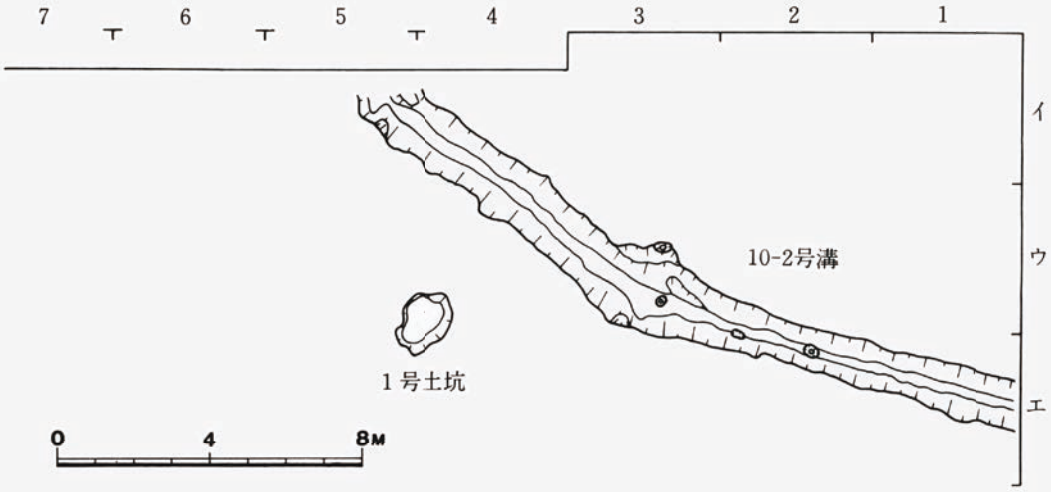
４月25日　調査区内セクション図作成。

５月17日　溝状遺構及び土坑を完掘。実測にとりかかる。

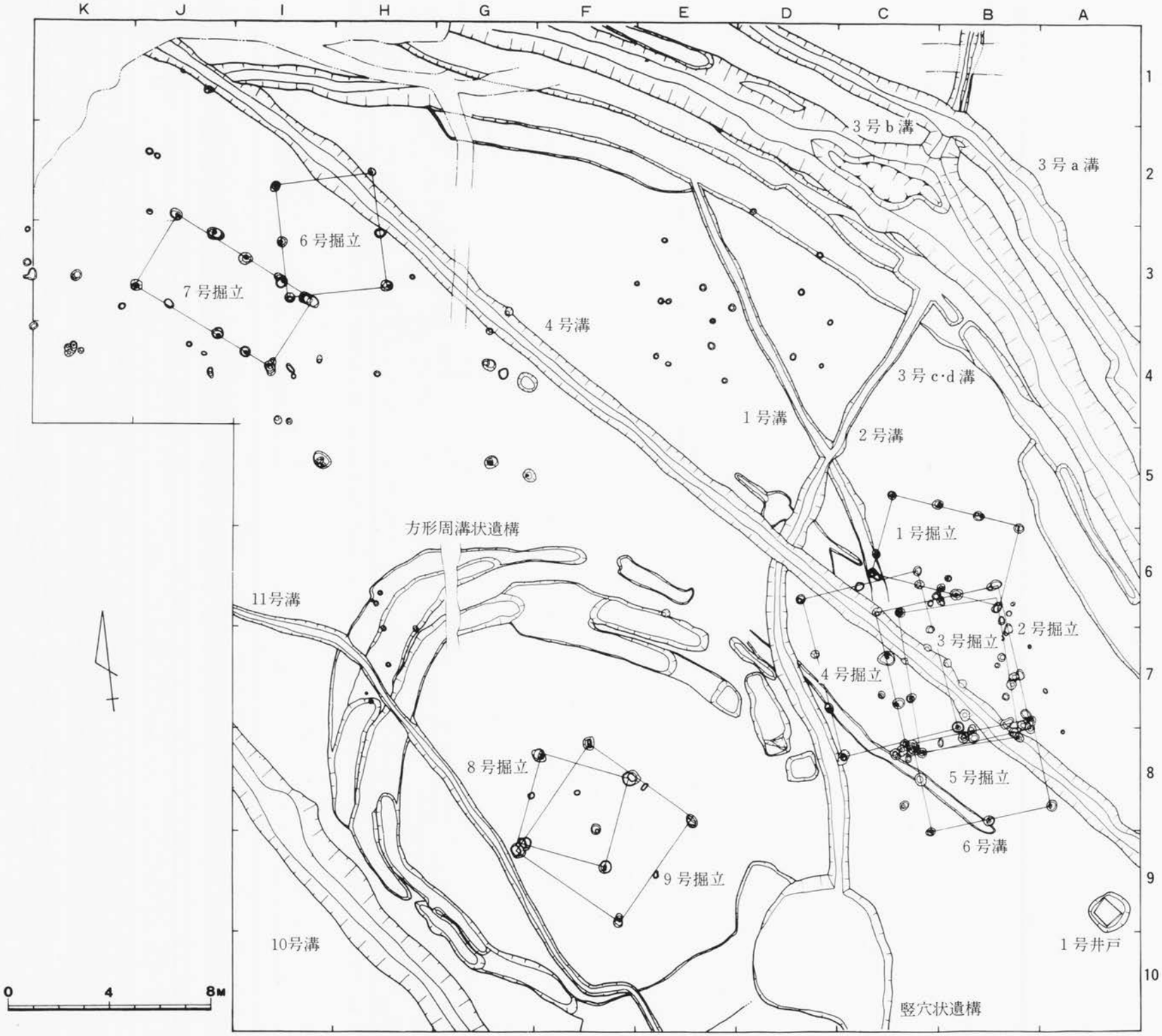
５月22日　発掘調査終了。



第２図　グリッド配置図



第３図　第２次調査区遺構全体図



第4図　第1次調査区遺構全体図

Ⅲ 遺構・遺物

1　調査区の概要

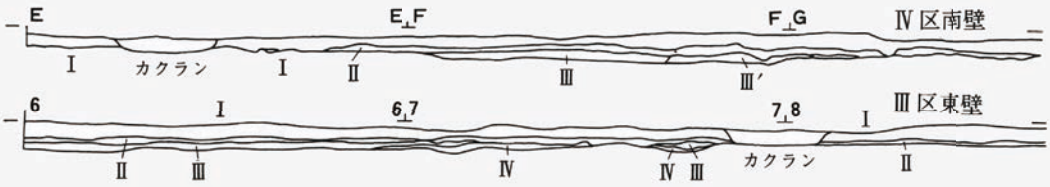
発掘調査区（第２図）

調査面積は、第１次調査が 1,570㎡、第２次調査が 1,060㎡である。調査区内の区画は、ほぼ磁北を向いて設計された建造物に平行する一辺４ｍのグリッドとして設定した。第１次調査区は、東から西へＡ～Ｋ、北から南へ１～10の記号を付し、「Ａ－１グリッド」の如く呼称、さらに大区分として、調査区セクションベルトの設定にあわせてⅠ～Ⅵ区・Ⅱ′区・Ⅲ′区・Ⅵ′区の計９区に区分けして調査を実施した。第２次調査区は、東から西へ１～７、北から南へア～シの記号を付し、「アー１グリッド」の如く呼称した。

遺跡遺存状況

調査区の基本層序は大きく四層に分けられる。土層堆積状況は、地山検出までの層厚が20～40㎝と概して薄く、Ⅰ～Ⅲ層は灰黒色～暗灰褐色を呈し、耕作土の漸移的変化或いは攪乱による層理面の形成として捉えられるもので、大部分が耕作土下において地山面の検出を見る。耕作機の痕跡が地山面に残っていることもしばしばで、Ⅲ層は地山土をブロック状に含む地山攪拌土として把握される。この攪乱は、明治43年から大正８年にまでわたる一帯の耕地整理に起因しているものであろう。従って、純粋な包含層は殆んど失なわれており、僅かに一部において暗褐色～黒褐色土が層厚３～５㎝程度で非連続的に残存しているにすぎない。これは古式土師器の包含層となっている。これらのことから、遺構覆土を構成する土層に連続して捉えられる層堆積はほとんど認められず、遺構確認面の層位的把握もない。

以上のように、一部地山面にまで及ぶ攪乱によって、旧地形の詳細は不明であるが、調査区中央部Ⅲ区付近の地山攪拌が著しく、Ⅰ区北東隅に若干の標高の低下を見ることができる。従って、調査区の大半は微高地状を成し、それをとりまく様に３号溝が形成された状況が予想される。しかし、遺構・遺物の検出は、第１次調査区を主として、第２次調査区では極めて稀薄となり、全体を通して決して濃密な分布とは言えない。遺物は、古墳時代から中・近世或いは現代のものが混在して検出されており、時期的にはバラエティーに富んでいるが、遺構との結びつきが確認されるものは限定される。



Ⅰ層：黒灰色土　Ⅱ層：淡灰褐色土　Ⅲ層：暗灰褐色土　Ⅲ′層：暗灰(黄)褐色土　Ⅳ層：黒褐色土

第５図　調査区土層断面図

（Ｌ＝2,800ｍ）

0　1　2ｍ

2 遺　構

(1) 掘立柱建物跡

検出されたピット総数は158個で、ほとんどがいくつかのブロック[1]を形成して、一定区域に集約する在り方を示している。概ね4つのブロックとして把握され、そのうち、掘立柱建物跡は3つのブロックを構成している。それぞれのブロック内では全て重複関係を有し、狭少範囲に固執しているかのような様相が看取される。(第4図)

第1ブロック(Ⅱ区)

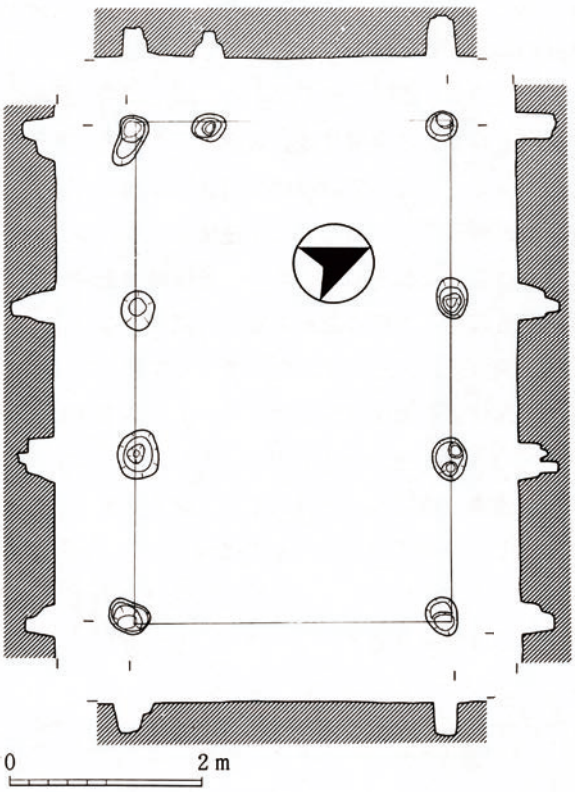
1号～5号の掘立柱建物跡が重複しながら密集する。棟方向では、1号・5号と2号～4号とに二分される。2号～4号建物は南北方向を妻側として東西方向にほぼ平行に重複するが、同一の方向性をもって関連づけられそうな多くの柱穴も、それぞれの掘立柱穴に近接して存在しており、建替え或いは重複関係の把握という点で多分に検討余地を残している。

1号掘立柱建物跡(第6図)

2・3・4号建物の北側に重複して検出された1間(3.3m)×3間(5.3m)の建物である。柱穴は、径40cm程度の不整円形或いはやや方形に近いものを含み、深さは40cm前後で比較的均等である。柱間寸法は、桁行が西より1.9m・1.6m・1.8mとバラツキをもつが、両桁とも同寸法で対応する。棟方向はN－68°－Wである。柱穴からの出土遺物はない。

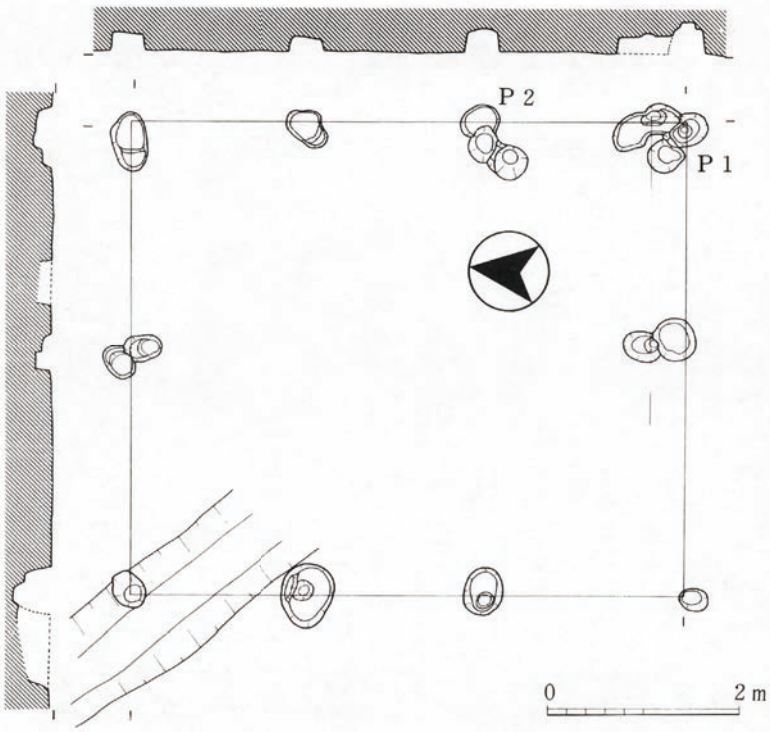
2号掘立柱建物跡(第7図)

3号建物を内包するかたちで捉えられた2間(5m)×3間(5.8m)の建物である。柱穴径及び深さにバラツキがあり、概して浅い20cm程度が主体的である。柱間寸法は、桁行が北より1.85m・1.85m・2.1mを測り、南1間分がやや広い。棟方向はN－6°－W。東柱列P1・P2より比較的多くの須恵器片・土師器片が出土している。



第6図　1号掘立柱建物跡

(1) 時間を考慮した建物グループとは異なる概念であって、単に視覚的なピット集中区域をさす。



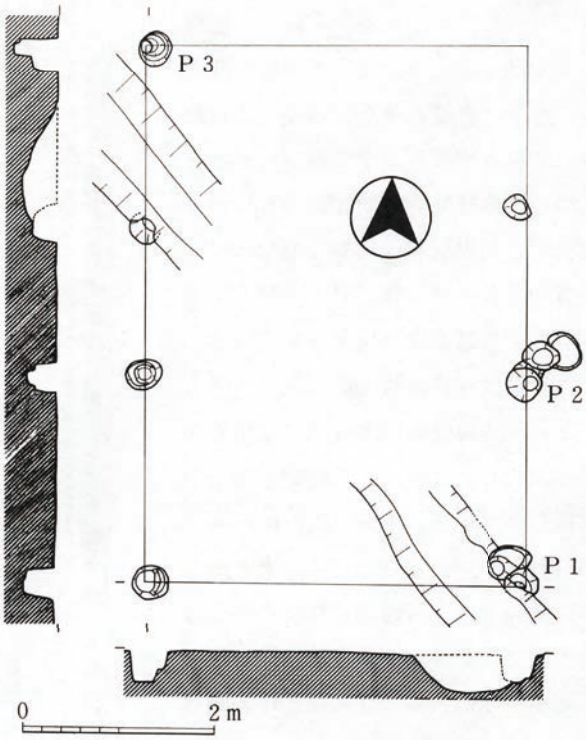
第7図　2号掘立柱建物跡

3号掘立柱建物跡（第8図）

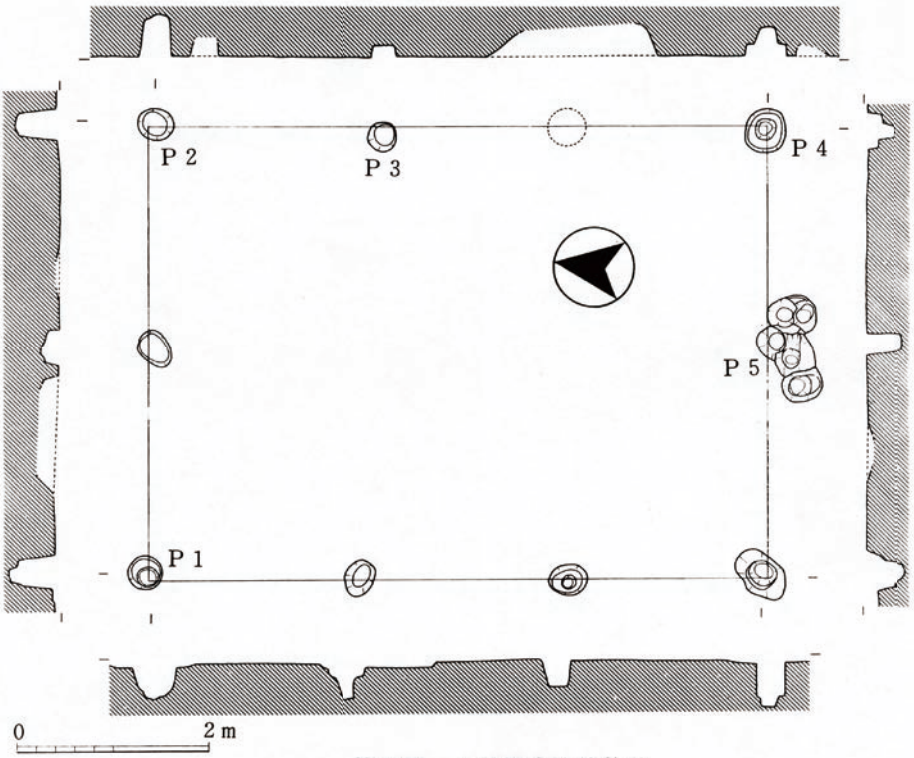
2号建物の内側にある1間（4m）×3間（5.6 m）の建物。北妻側柱穴の一つが確認されず、また、東西柱列の柱間寸法にもバラツキがあり、2号建物を含めた関連で保留すべき要素をもつ。5号溝との重複関係については本掘立が後出のものとして捉えられた。棟方向はN－3°－Wである。P1・P2・P3から若干の須恵器片と土師器片が検出されている。

4号掘立柱建物跡（第9図）

2号・3号建物の西半分に棟方向をほぼ同じにして重複する2間（4.8m）×3間（6.5 m）の建物である。東側柱列で4号溝との重複により、確認で



第8図　3号掘立柱建物跡

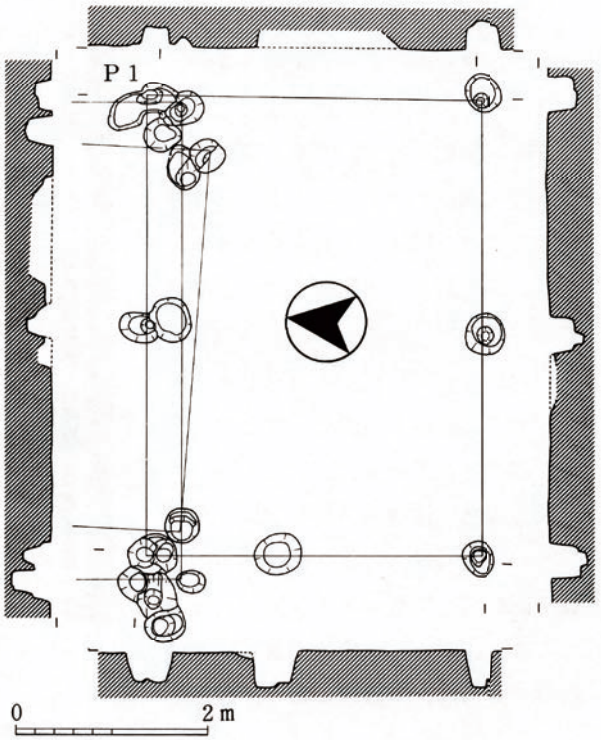


第9図　4号掘立柱建物跡

きなかった柱穴があるが、総じて柱筋はよく通っている。柱穴の形状・深さ等にバラツキはあるが、四隅の柱穴が40～50cmとややしっかりとした深さをもつ。西側柱列の柱間寸法は2.15m等間隔で、他の掘立に比してやや広い。棟方向はN－8°－W。P1～P5で須恵器片・土師器片が検出されている。

5号掘立柱建物跡（第10図）

2号～4号建物南妻柱列に北桁筋がほぼ並行し、2号・3号建物とはやや重複して存する、1間（3.5 m）×2間（4.8 m）の建物である。妻と桁方向の関係では1号建物に類するが、柱列方向では2号～4号建物に強く関係していそうである。柱穴は、径40cm前



第10図　5号掘立柱建物跡

後の円形で深さ約40cmを測り、柱筋も比較的通っている。P１のみがやや浅く不整形である。重複部の柱穴群の中での検討余地も残そうか。南側柱列の柱間寸法は西より2.35m ・2.45m である。棟方向はN－85°－E。P1・P2より須恵器片・土師器片が出土している。

第２ブロック（Ⅴ区）

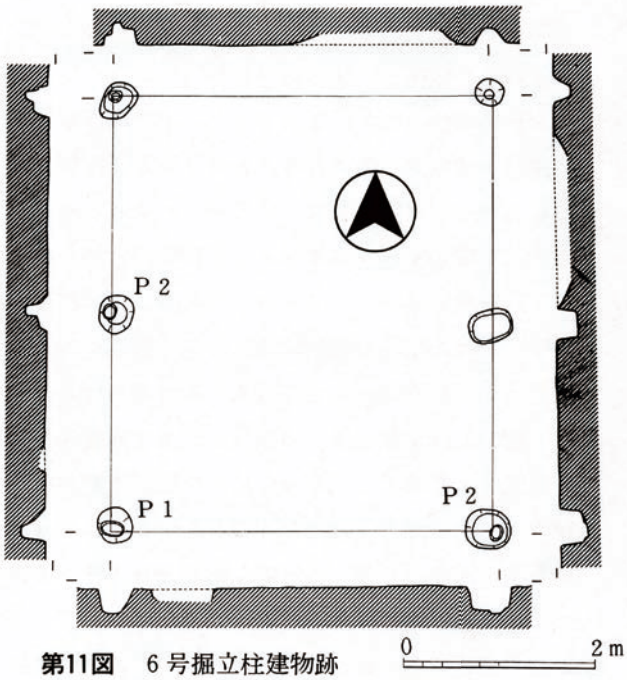
H～K－１～４グリッドにある。２棟の掘立柱建物跡と、その他散在する大小の柱穴からなる。２棟の建物は棟方向を大きく異にして重複し、第１ブロックの１号建物と他の関係とのそれに類する。

６号掘立柱建物跡（第11図）

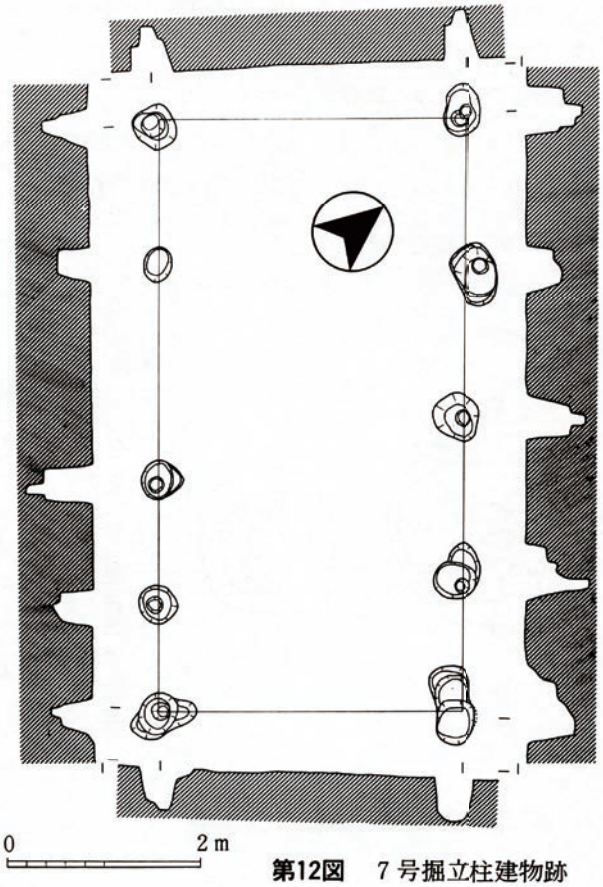
１間（４ｍ）×２間（4.6 ｍ）の建物。柱間寸法は深行が３号建物と同値で広く、桁行は 2.3m を測る。柱穴は径40cm前後の若干四角味を帯びた円形。深さは30cm前後で、柱筋は良く通り、西側柱列の柱穴下底に15cm程度の柱根穴が良好に残されている。棟方向はN－1°－W。Ｐ１・Ｐ２より須恵器片・土師器片が３片のみ出土している。

７号掘立柱建物跡（第12図）

６号建物南西コーナーに小規模な重なりをみせる１間（3.2 ｍ）×４間（6.2 ｍ）の建物。柱筋がやや歪み、柱間寸法も不揃いで、北側柱列で西より1.6ｍ ・1.6ｍ ・1.75m ・1.25m を測る。柱穴径は40cm～60cmあり、深さも50cm～70cmに及ぶものが主体を成す等しっかりしている。棟方向はN－51°－W。柱穴からの出土遺物はない。



第11図　６号掘立柱建物跡



第12図　７号掘立柱建物跡

第３ブロック（Ⅲ区）

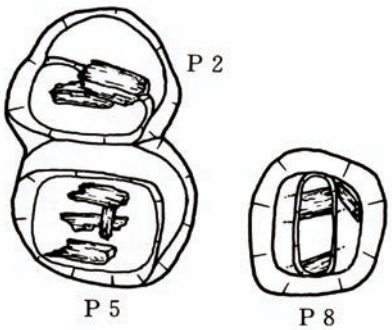
８号・９号掘立柱建物跡（第15図）

方形周溝状遺構に囲まれるかたちで２棟が重複して存在する。両者ともに正方形を呈し、相互に強い関連性が指摘される。８号建物では西柱列に、９号建物では北及び東柱列に中柱とも考えられるピットが検出されているが、いずれも浅く、四隅の主柱とはかなり性格的な差異をみせるため、１間×１間を基本形とする建物の建替え拡張の結果として両者を捉えることが妥当と思われる。柱間寸法は、８号建物で1.８m、９号建物で2.５m を測る。柱穴は、深さが40cm前後で、径40～50cmの略円形或いは隅丸方形に近い形状を呈する。Ｐ１以外の主柱からは礎板が検出されている。比較的良好な遺存状態をみせるのはＰ５・Ｐ８・Ｐ９で、後二者では、掘り方下底に木材を配した後に柱根周囲の掘り方埋土が形成されていることが看取される。一応礎板と表現したが、Ｐ８・Ｐ９では明らかに柱根下底部に空白部を設定している点や、やや部厚く幅の狭い材を使用している点、さらにＰ４やＰ６・Ｐ９等の検出状況もあわせて考えれば、むしろ根固めの機能をもたせるためのものと解した方が良さそうである。

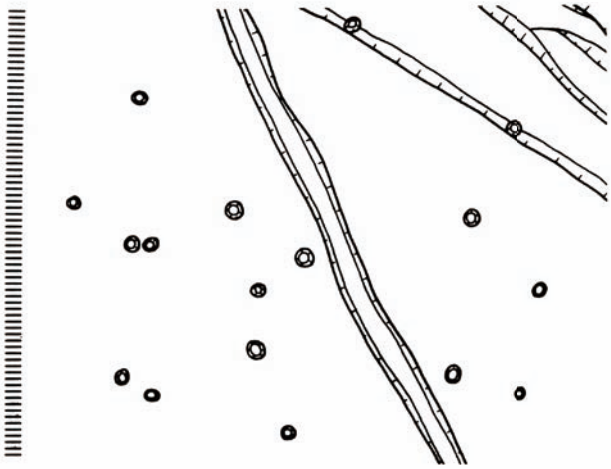
本掘立柱建物の柱穴からの出土遺物はなく、所属時期の確定はできないが、他の建物に比べてかなり異質である観が強く、少なくとも性格的に異なる建物として捉える必要があろうと思われる。特に、周囲を囲む方形周溝状遺構との何らかの関連性を指適することも可能で、この点については後述するものとしたい。

第４ブロック（Ⅳ区）

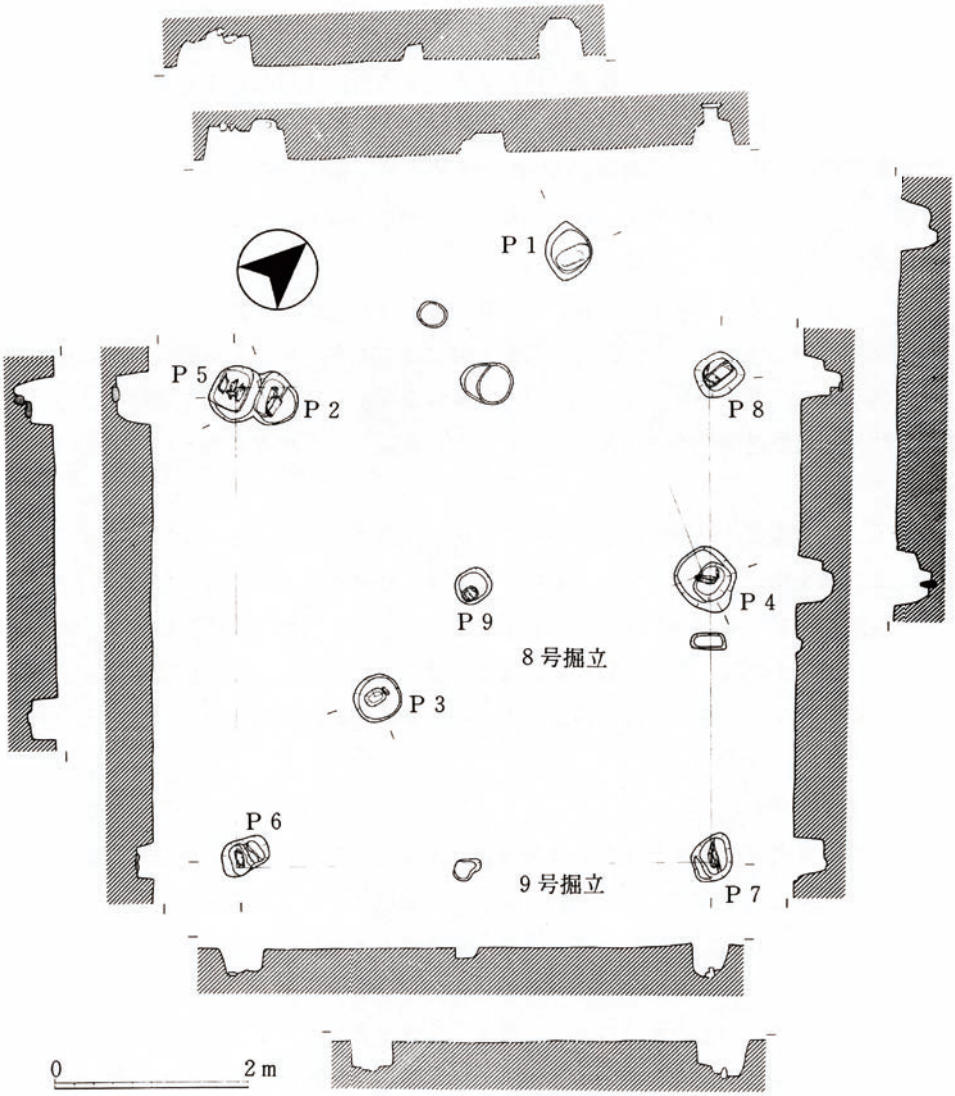
Ｄ・Ｅ－３・４グリッドにおいてほぼ円形の分布をみせる小ピット群である。径15cm程度で深さは10cm～20cmを測る。所属時期は不明である。



第13図　８号・９号掘立柱穴礎板



第14図　柱穴第４ブロック



第15図　8 号・9 号掘立柱建物跡

(2) 溝状遺構

溝状遺構は、1号～11号溝として確認・検出したが、調査終了時には7号～9号溝及び一部土坑を含めて「方形周溝状遺構」として統括している。また、5号溝は調査区北辺際に横走していたものであるが、近・現代の水田用排水溝と判明したため欠番となっている。同様の溝は、Gラインに本溝と直行するかたちで検出されており、学校建設前の水田区画の一部を示すものである。

1号溝

3号溝及び2号溝を切って交又し、N－35°－Wのち位を測ってほぼ直線的にのびている。プランは、掘立柱穴群第1ブロック北辺付近で深さを減じ途切れる。幅は50cm前後、深さ10cm前後で断面浅い皿状を呈し、溝底面レベルは北へ向って微妙な傾斜をみせる。出土遺物はなく時期不明であるが、検出された遺構の中では最も新しい段階に位置付けられると思われる。

2号溝

B～Dライン内を南北にやや蛇行しながら調査区を縦断する。C・D－9・10グリッドの竪穴状遺構及び4号溝を切っている。プラン上は、3号溝を抜けてB－1グリッドの溝に一見連続して捉えられるように見えるが、3号溝を横断する切合いプランの検出は成し得ておらず、土層等の観察から、区別して把握される。幅50～80cmで、深さは10～15cm、断面皿状を呈し、南半にかけて若干明確な立ち上がりをみせる。溝底面の一定の傾斜方向は認められない。出土遺物はなく、時期不明である。

3号溝（第16図）

3号溝は、調査区北東部にあたかも4号溝を弦とする弓状を呈して検出された。当初は幅8mに達する大溝プランとして確認していたが、掘り下げの段階で3号a溝と3号b溝及び段状の浅い溝状遺構（3号c・d溝）に分離され、それらが並走するかたちで捉えられた。

3号a溝：3号b溝外郭に並走する溝である。幅は平均1m、最大で1.8mを測る。深さは20～30cmを測り、断面形はゆるやかなU字状を呈する。水流方向を示すような溝底面のレベル的差は認められない。層序は、3号b溝上層が本溝のほぼ全層に対比されるかたちで把握された。出土した土器は少量であるが月影Ⅱ式期のもので、殆んどは溝底直上付近の出土である。

3号b溝：本調査区内最大規模の溝である。本溝のさらに内側にいくつかの溝（c・d溝他）が存在するが、非常に浅い皿状を呈したり、低い段を形成する程度のものであるなど、プランが不明確である。b溝は、C－2グリッドで幅3.7m、深さ70～80cmの最大値を測り、下底部に不整舟底状の深まりを有する。他は幅約2m、深さ30～40cmを測り、断面形はやや不整なゆるいU字形を呈する。底面レベルは、C－2グリッドの深まりに向かってゆるい傾斜をみせ、最大深を測る位置から北へ直交してのびるB－1グリッドの小溝は水流（排水）面で関連付けられる可能性がある。層序は、C－2グリッドで12層にわたるが、他は基本的には6層区分で、1・2層は表土層或いはその影響下で捉えられる層、3層・4層（3号b溝上層と呼称）が3号a溝全層に対比させることができる。この上層が主たる遺物包含層で、3号a溝下底遺物と同期であるが、

遺物遺存状況は極めて悪く、C－2グリッドを中心として小破片が密集し、個体上のまとまりもみられない。遺跡全体の攪乱状況との関連でやや不安も残る。下層は無遺物層をはさみ、B－3グリッドの下底に甕胴部と思われる同一個体土器片が31片検出されているにすぎない。この下底遺物と土層遺物は明らかな層位差を有しているが、下底遺物の器形属性検出は困難で、型式対比はできない。ただし、胎土は異質で、径1～2㎜の荒砂粒を多量に混在する悪質なものである。

— セクションの5層と6層の間層として、炭化物片を多量に含む薄層が認められ、4号溝・方形周溝状遺構で検出された炭化物層との対比が指摘できる可能性がある。

4号溝（第16図）

南はA－9グリッドから北はJ－1グリッドまで調査区を斜断するようにN－50°－Wの方位をもって直線的にのびる。幅は1m前後、深さは30～40cmで断面はU字形から逆台形を呈し、全体を通して形状の変異は少ない。底面の一方向へのレベル的差異は認められない。2号溝及び掘立柱穴に先行するものであるが、遺物は一切検出されておらず、所属時期は不明。セクションでみる炭化物層の存在及び土質等を積極的に評価すれば、方形周溝状遺構（古墳時代前期）との共時性が指摘されようか。

6号溝

D－7・B－8グリッドにおいて、掘立柱穴群第1ブロックに一部重複し、4号溝に平行して存する。幅40～50cm、深さ5～10cmの断面浅い皿状を呈する。土師器片が2片出土している。古墳時代前期に位置付けられよう。

10号溝（第16図）

第1次調査区西南隅から4号溝と平行するかたちで検出され、第2次調査区でも連続して捉えられる延長部を検出している。(10－2号溝）直線的なプランをもち、J－3グリッドでやや屈曲する。幅は1.5 m～2mを測り、屈曲部以東では若干幅を減じ1m～1.5 mとなる。深さは約40cmで断面形はゆるいU字状からやや逆台形に近い形状を呈し、3号溝に次ぐ規模をもつ。フク土は、3号b溝上層、方形周溝状遺構と同質で、下部層主体に同期遺物が検出されている。

11号溝

E－10グリッドからI－6グリッドにかけて、一部蛇行しながら10号溝にほぼ平行に存する。幅40cm前後、深さ15～20cmで断面は逆台形を呈し、小形ではあるが、しっかりとした形状をみせ、全体を通して変異も少ない。時期不明であるが、方形周構状遺構を切っている。

(3) 土　坑

本遺跡からの検出土坑は少なく、第1次調査区では、方形周溝状遺構に統括された2基のみ、第2次調査区で、単独で1基検出されている。不整惰円形を呈し、長軸1.7 m、短軸1.3 mを測る。近・現代の攪乱・削平により上部は失なわれており、検出された深さは5cm前後である。古墳時代前期の所産で、土器細片が多量に検出されている。

(4) 竪穴状遺構

C・D－9・10グリッドにおいて検出した。円形に近い隅丸方形を呈し、径約5.5 mを測る。立ち上がりは比較的緩傾斜で、深さは10cm程度である。フク土は淡暗褐色の単層で、2号溝によって切られている。本遺構上層部において須恵器の集中がみられる。性格等は不明であるが、平安時代に位置付けられようか。

(5) 井　戸（第16図）

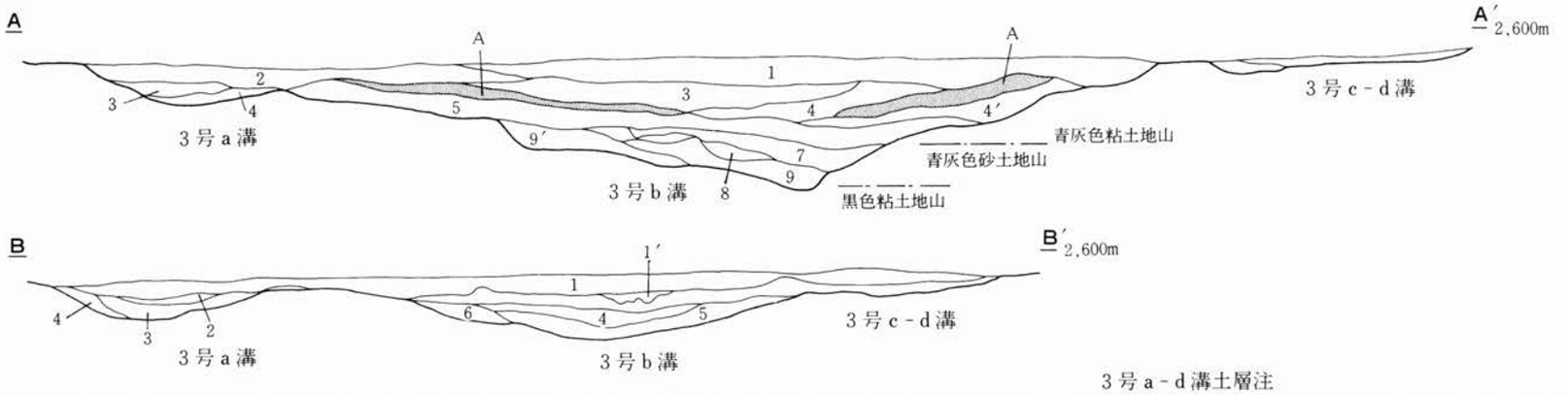
調査区南東隅A－9グリッドで1基のみ検出されている。方形縦板組横桟型の井戸である。井側は東南側二辺において土圧による変形と崩壊が著しい。平面形は、一辺1mの正方形に復原される。側板は幅15cm前後、厚さ約3cmで、現存最大長は120 cmを測る。横桟は5cm×10cm断面長方形の角材を用いている。掘り方は平面方形を呈し、井戸としては浅く、130 cmで下底部を検出した。

出土遺物としては、井戸枠中層付近より、土師器　（第30図9～11）及びその他須恵器の壺或いは甕の胴部破片が検出されている。平安時代も10世紀中葉以降のものであろう。

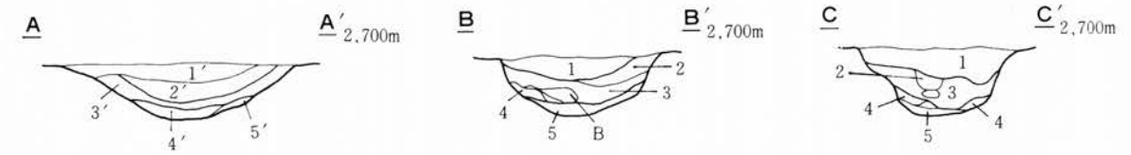
掘立柱建物跡一覧

建物番号	方　　位	柱　　間 (桁行×梁行)	桁　行	梁　行	検出区	備　　考
1号掘立	N－68°－W	1間×3間	3.3m	5.3m	Ⅱ区	
2号掘立	N－6°－W	2間×3間	5.0m	5.8m	Ⅱ区	柱穴出土遺物あり
3号掘立	N－3°－W	1間×3間	4.0m	5.6m	Ⅱ区	
4号掘立	N－8°－W	2間×3間	4.8m	6.5m	Ⅱ区	柱穴出土遺物あり
5号掘立	N－85°－E	1間×2間	3.5m	4.8m	Ⅱ区	〃
6号掘立	N－1°－W	1間×2間	4.0m	4.6m	Ⅴ区	〃
7号掘立	N－51°－W	1間×4間	3.2m	6.2m	Ⅴ区	
8号掘立	N－22°－E	1間×1間	1.8m	1.8m	Ⅲ区	礎板(根固め)有り
9号掘立	N－42°－E	1間×1間	2.5m	2.5m	Ⅲ区	〃

3号溝土層断面図



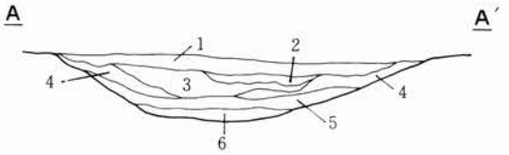
4号溝土層断面図

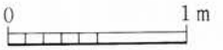


4号溝土層注

1層　濁暗(黄)褐色土：黒褐色土を主体とし、淡黄褐色土ブロック(2㎜～2㎝)を多量に含む。
2層　黒(灰)褐色土　：淡黄褐色土ブロック(2㎜～2㎝)をやや多く含む。
3層　黒灰褐色土　　：2層よりやや淡い。淡黄褐色土ブロック(1～5㎜)をやや多く含む。
4層　　〃　　：黒色の最も強い層。淡黄褐色土ブロック(1㎝)を時折含む。
5層　　〃　　：灰褐色が全体に強いが、黒色土粒を多量に含む。
1′～5′は地山の砂質化の影響を受けた土層。　太線は炭化物片層。

10号溝土層断面図



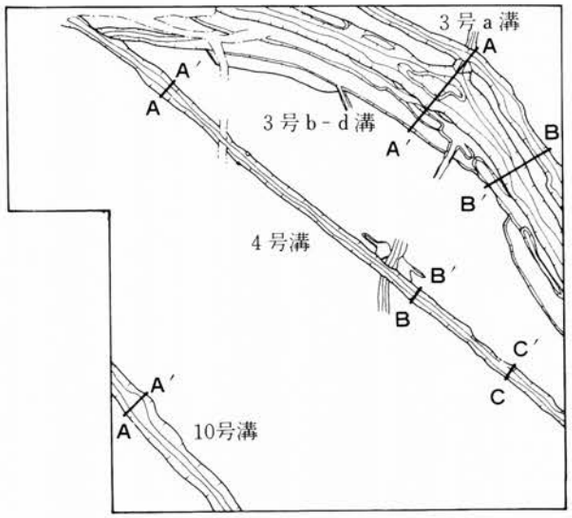


10号溝土層注

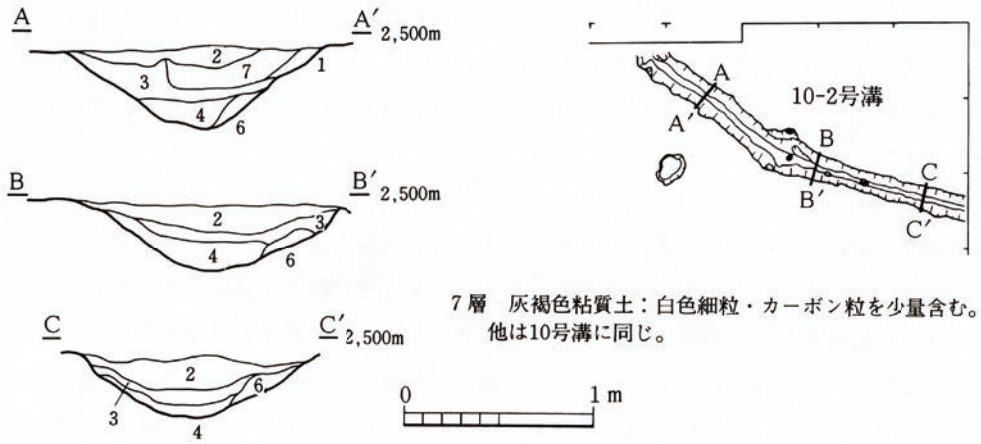
1層　黒褐色土　　：白色細粒を多量に、黄褐色ブロックをやや多く含む。
2層　淡灰褐色土
3層　黒褐色土　　：黒色が最も強いが濃淡あり。地山ブロック(1～3cm)を時折含み、白色細粒を少量含む。
4層　　〃　　：3層よりやや淡く、弱い灰色を滞びる。
5層　黒灰褐色粘質土：灰色を強く滞びる。
6層　灰黒色粘質土　：黒色土を主体として、灰色を滞びる。地山ブロックを時折含む。

3号a－d溝土層注

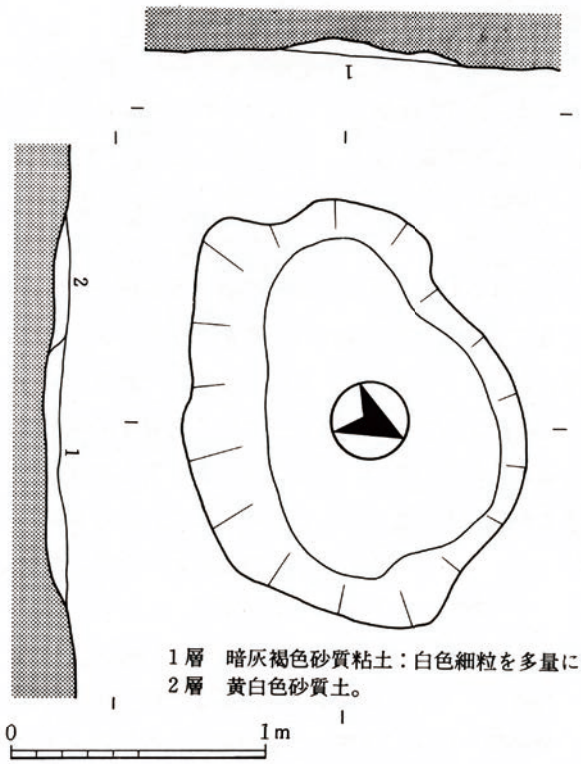
1層　(暗)淡灰褐色粘質土：黒褐色粘質土小ブロックを全体に少量含む。
1′層　　〃　　：1層よりやや淡い。
2層　暗灰褐色粘質土　：カーボン粒を時折含む。
3層　黒(褐)色粘質土　：上層遺物の包含層。
4層　黒灰褐色粘質土
4′層　　〃　　：4層より淡い。
A層　黒色粘質土　　：カーボン粒を主体とする。
5層　淡黒灰褐色粘質土：カーボン黒褐色粘質土ブロックをやや多く含む。B－B′では下部に青味を滞びる。
6層　暗(青)灰褐色粘質：地山との漸移的層。
7層　黒灰(褐)色砂質土：5層より黒色強く砂質。
8層　暗(青)灰色砂土　：地山崩壊質土。
9層　黒灰色砂質土　　：黒色・青灰色粘質土ブロックが混在する。
9′層　暗青灰色砂土　　：地山崩壊質土。



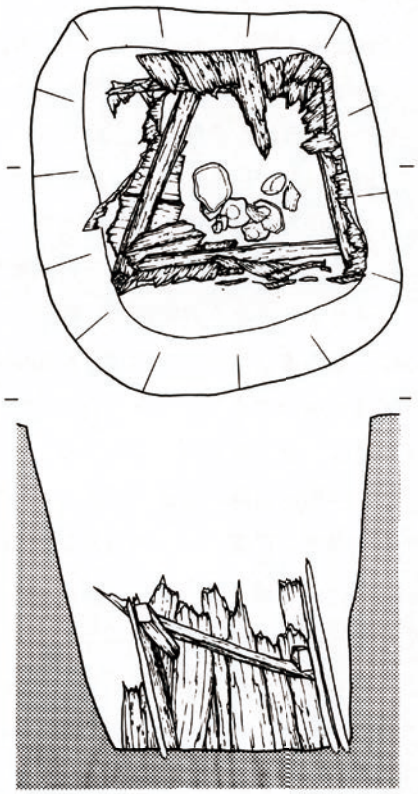
第16図　溝状遺構土層断面図（S＝1／40）



第17図　10－２号溝土層断面図（S＝１／40）



第18図　１号土坑（S＝１／30）



第19図　１号井戸（S＝１／30）

(6) 方形周溝状遺構

第1次調査区Ⅲ区全体を取りかこむかたちで検出され、内側には8号・9号掘立建物がある。当初は、東辺の長方形及び方形の土坑をそれぞれ1号土坑として確認し、・2号土坑北辺の溝を7～9号溝としていた。全体が明らかになるにつれて、それぞれがほぼ方形のつながりをみせる一体的な遺構として捉えうる観が強くなり、溝の分断等の多くは上部の攪乱作用に起因しているものと考えた方が妥当と思えるに至った。

全体の形状は、一辺約17m のやや不整な隅丸方形を呈し、東辺に幅約3.5m の開口部がみられる。周溝は、幅約0.5m ～1m の溝2～3条が並走そして重複する様にめぐっており、従って、幅いんの変異は激しい。また、それら溝の内部においても、土坑状の深まりを非連続的に形成するなど、全体に複数溝をたばねた様な在り方を呈する。ただし、それぞれに明確な前後関係は把握されていない。上部の攪乱が左右して、総じて浅い皿状を呈し、最も深いところで20cm程度を測るにすぎない。東南部、竪穴状遺構にかけての溝は、痕跡程度のもので、プランとしては確実視し得ない。

土層は、白色細粒をやや多く含んで、若干濁った暗褐色～黒褐色を基調とする。都合5層に分離されるが、1枚から2枚の炭化物片を敷きつめたような層理面が形成されており、遺物のほとんどは、この下位炭化物層の直上か（図版　4　）、地山直上で検出されている。この2枚の炭化物面は4号溝のもの、及び3号b溝　層に通じるものと思われる。

遺物は、東辺の土坑状の2ケ所及び、西辺に極だつ集中をみせ、本遺跡にあっては、質・量ともに最も良好な遺存状況といえる。また、西辺には、長径20cm前後の惰円の河原石が16個散在して検出されており、確実な搬入品である。土器は蓋類が特に充実して認められ、他に、高坏や器台、台付長頸壺等供献関係の土器へのかたよりが指摘される。

8号・9号掘立柱建物跡との関連性について

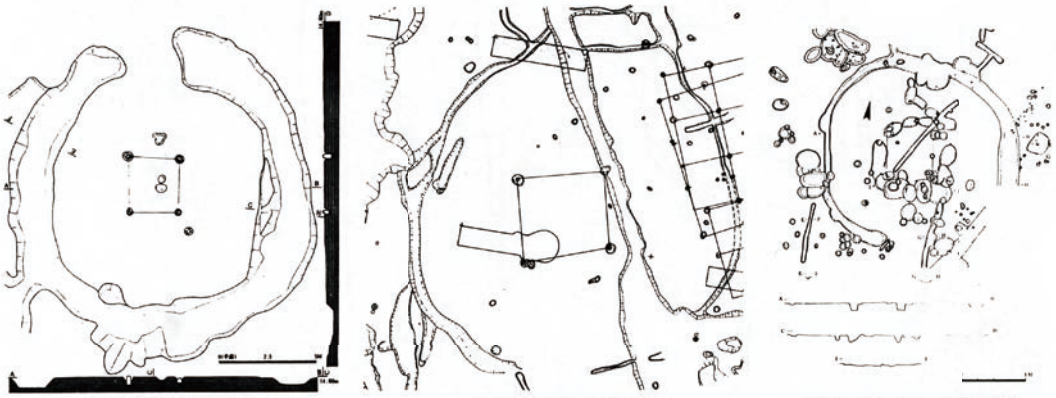
8号・9号掘立建物跡は、柱穴からの土器出土がみられず、所属時期は不明であるが、性格的に、他の掘立建物との相違性が指摘される。正方形を基本として規模の差異をみせるこの二棟は、同様な機能にあてられたものの建替えとして理解されよう。従って、性格としてまず考えられることは、他の掘立の一部と併存する倉庫跡としての捉え方である。グループ間の共有を示唆する様な中間的位置に倉庫が設置されることは時折認められることで、第1ブロックと第2ブロックとの共有の位置という積極的な評価も許されようか。しかしながら、むしろここでは、方形周溝状遺構に開連するものとして注意しておきたいと考えている。それは、当該期における下記の様な類例の存在に鑑みてのことであり、可能性としての指摘にとどまるものである。

類似遺構の検出例としては、富山県上市町江上A遺跡ＳＢ14・ＳＤ03のセット、同町江上B遺跡ＳＢ111・ＳＤ020のセット（上市町教委　1981）、金沢市新保本町西遺跡1号住居址（金沢市教委　1985）があげられる。江上A遺跡例（第20図　）は、径17m の馬蹄形溝で若干隅丸方形状を呈し、溝幅は2m ～3m を測る。中央部に1間（2.8m）×1間（2.8m）の建物を有し、

柱穴には礎板が残存している。出土遺物に、玉工房にかかわるものが多くみられる。江上B遺跡例は、径約17m の環状溝であるが、やはり一部に開口部をもつ。溝幅はやや狭くなり、約30cm～60cmを測る。中央部に1間（4.5m）×1間（4.4m（4m））の建物を有する。報告では、これら全体に竪穴住居址との可能性を指摘しており、床面積は実に 214m² に及ぶことになる。金沢市新保本町東遺跡例は、江上A遺跡例に類似し、径約12m でやや隅丸方形に近い馬蹄形を成す。溝幅は約40cm～130 cmを測る。中央部の建物は1間（2.8m）×1間（2.7m）で、本遺構についても全体として竪穴住居址との可能性が示されている。

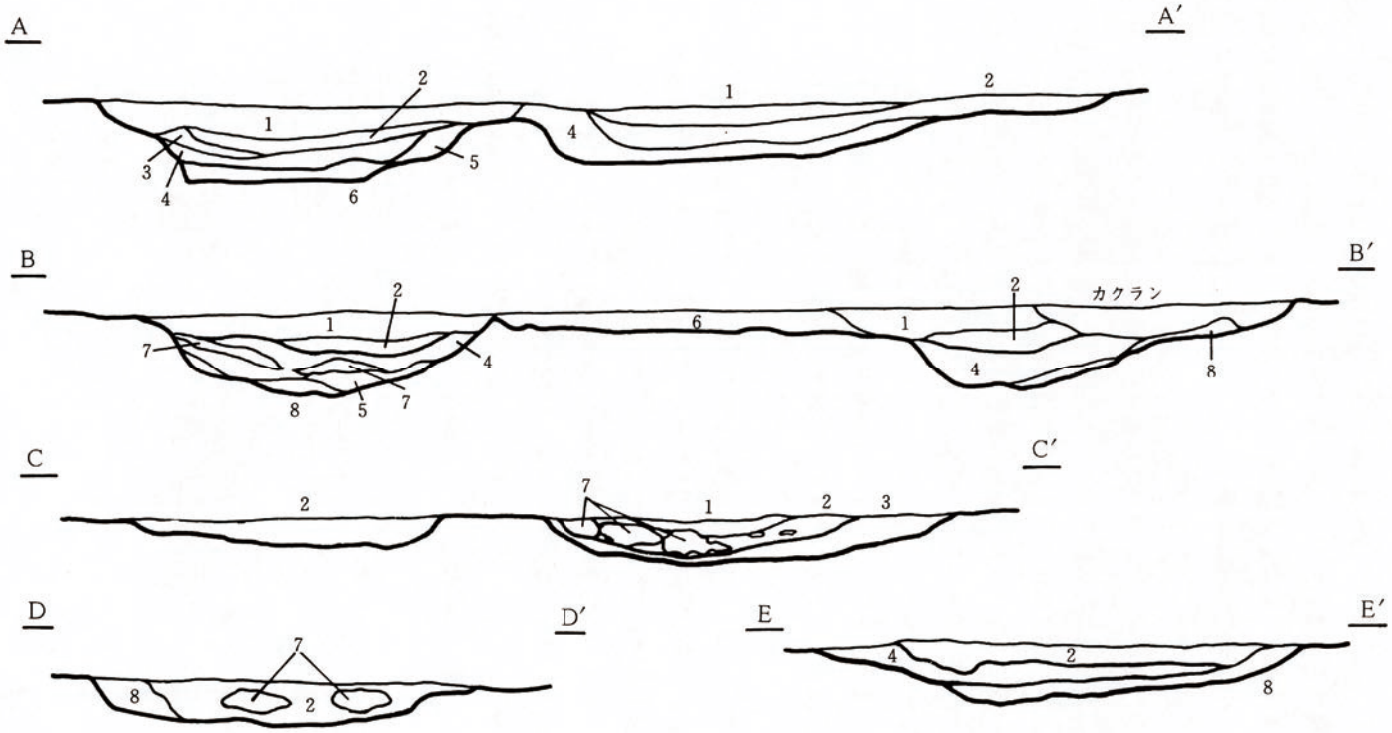
さて、本遺跡との共通点としては、周溝の一辺に掘り残しの開口部を有すること、周溝径が江上両遺跡に近似すること、9号掘立の柱間寸法が江上A遺跡・新保本町東遺跡例と近似値を測ること等があげられる。江上B遺跡と新保本町東遺跡は、これを竪穴住居址との前提に立って、大型住居の一様相に加えている。ただ、これらを竪穴住居址とし、壁周溝と認めた場合、柱穴から壁までの寸法の異様な拡がりや、周溝幅等に、疑問が生じないわけでもない。これら周溝はむしろ住居外施設との理解が妥当性をもってくるように思える。漆町遺跡チュウデン地区の調査（石川県埋文センター　1986）では、1号竪穴住居址の周囲を環状に廻る溝が検出されており、その径は17.6m と極めて近い状況をみることができる。立地等の関係からの追求も必要となってこよう。

本遺構で残された問題点としては、先に倉庫跡としての可能性を示したが、周溝と掘立建物が全く分離されるとした場合、周溝の性格が問題となってくる。当初本溝を方形周溝墓として捉えた経緯がある。それは、出土遺物が蓋等が甕類に比して顕在化した状況がうかがえたためであり、供献関係土器の卓越が他の遺構との性格の相違性を示している様に思えたからである。このことは、掘立建物との関連で捉えた場合においても同様な問題点をもっている。これらのことは、遺存遺物の偶然的な偏りを示すにすぎないのであろうか。江上A遺跡での玉工房関係資料の検出や、大形住居との関連性を仮に考慮した場合に、ある特殊な場としての検討余地は充分に残されていると言える。



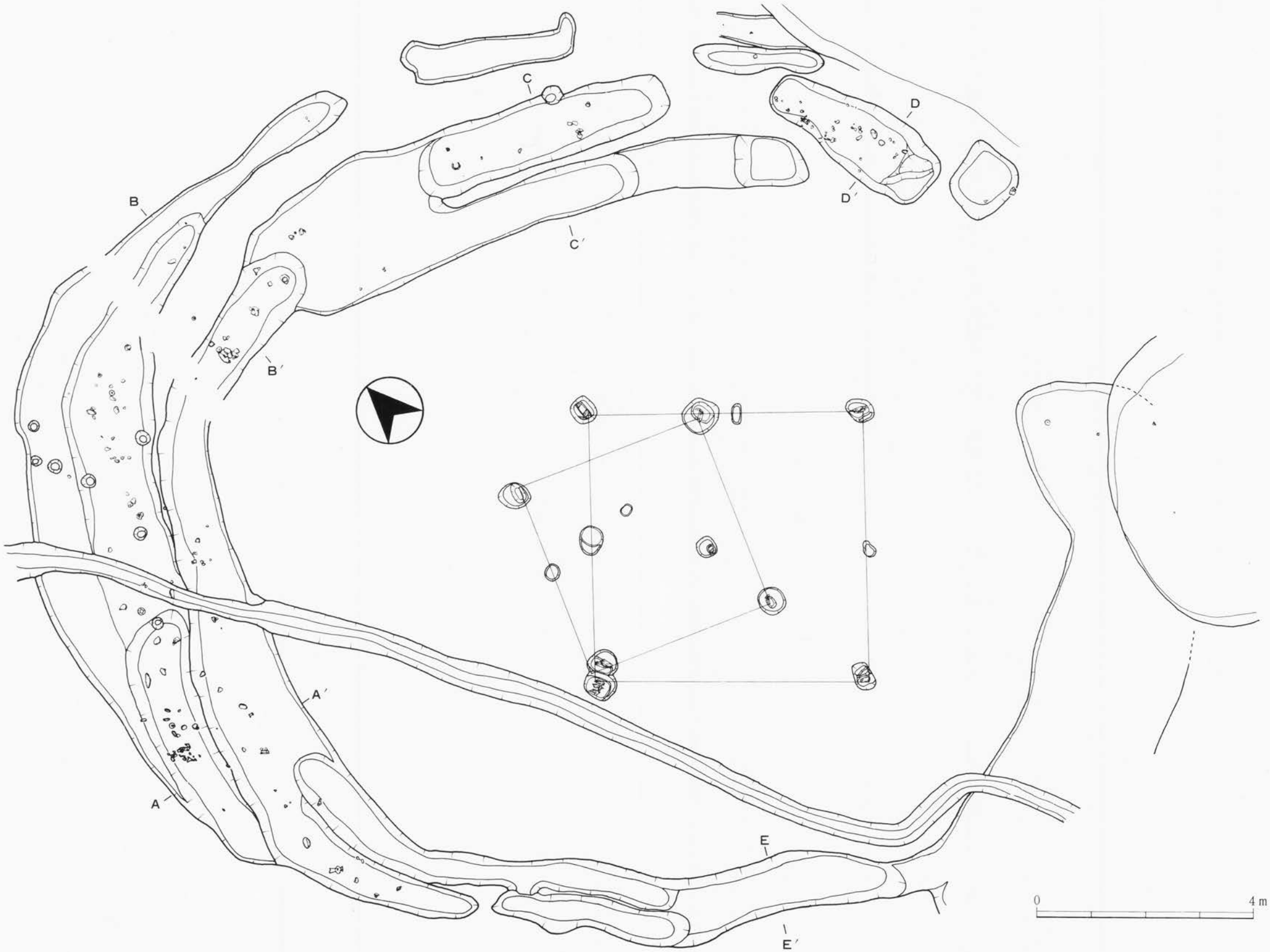
上市町江上A遺跡　　上市町江上B遺跡　　金沢市新保本町東遺跡

第20図　環状溝を持つ建物



1層　暗褐色土：白色細粒を多量に含む。
2層　黒褐色土：　〃　。地山ブロックを多量に含む。
3層　暗灰褐色土：　〃　。
4層　黒褐色土：地山ブロックを多量に含む。
5層　黒褐色土：4層よりやや黒色強い。
6層　黒灰褐色土：地山ブロックを少量含む。
7層　暗黄白色粘質土：地山ブロックを主体とする土。
8層　淡褐色土：地山との漸移的層。

第21図　方形周溝状遺構土層断面図（S＝1／20）



第22図　方形周溝状遺構と８号・９号掘立柱建物

3 遺　物

(1) 弥生時代末～古墳時代前期の遺物

本遺跡出土の土師質土器については、その破砕・磨滅が著しく、包含層出土の大半は、時代判別の困難なものばかりであった。第24図須恵器の接合・グリッド別出土点数概念図でみるように包含層全体に及ぶ広汎な攪乱作用が大きな原因と言える。掘立柱建物跡及び伴出遺物を有しない遺構を除いて、全て当該期に結びつく遺構であるが、各遺構、一括資料としての組成及び点数の乏しさは否めない。また、遺物の遺存状態は極めて悪く、器面はほとんど剝落し、調整等の詳細な観察を成し得たものは皆無に等しい。実測遺物については、甕類の大半は、口縁帯だけの完存率でみても、50%を超えるものは1～2点で、口縁径については推定値による復原実測が大半であることを付記しておく。以下に、遺構毎に簡単な状況等の説明を加えたい。

3号b－d溝出土土器（第25図）

上層遺物のみが図化の対象となった。土器は細片主体で、後世の攪乱が予想され、20の様な新しい段階を示すものの混在がみられる。装飾器台の破片（17）が検出されている。また、凝灰岩製と思われる勾玉が1点検出されている。長さ 2.2cm、幅 1.1cm、厚さ 0.7cm、重さ 3.3g 。

3号a溝（第26図21～32）

ほとんどの遺物が下底部付近よりの検出であるが、土器片総点数は70点と少ない。甕・高坏・鉢の三種の組成のみを知り得る。

10号溝（第26図33～37）

土器片総数25点と極めて少ない。一応、甕・高坏・鉢・蓋がみられる。

10－2号溝（第27図）

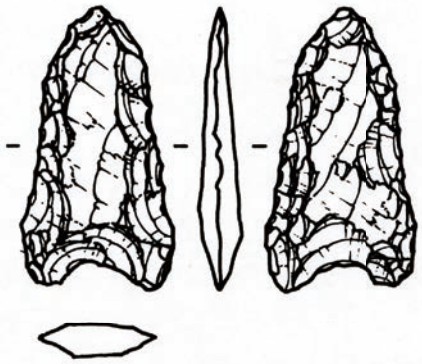
第2次調査区で検出したが、形態・位置等から、10号溝と連続して捉えられる可能性の強いものである。47は器面の損傷で詳細な観察はできないが、庄内系タタキ調整痕と思われるものが胴部にかけて認められる。口縁は外傾弱く、やや内湾ぎみに立ちあがる。52の高坏は、やや柱状に近い脚部が四方の透穴を機に強くラッパ状にひらくもので、81とほぼ同様の形態をもつ。蓋二点は比較的小形で部厚くボデッとした感じのものである。

方形周溝状遺構（第28図・第29図）

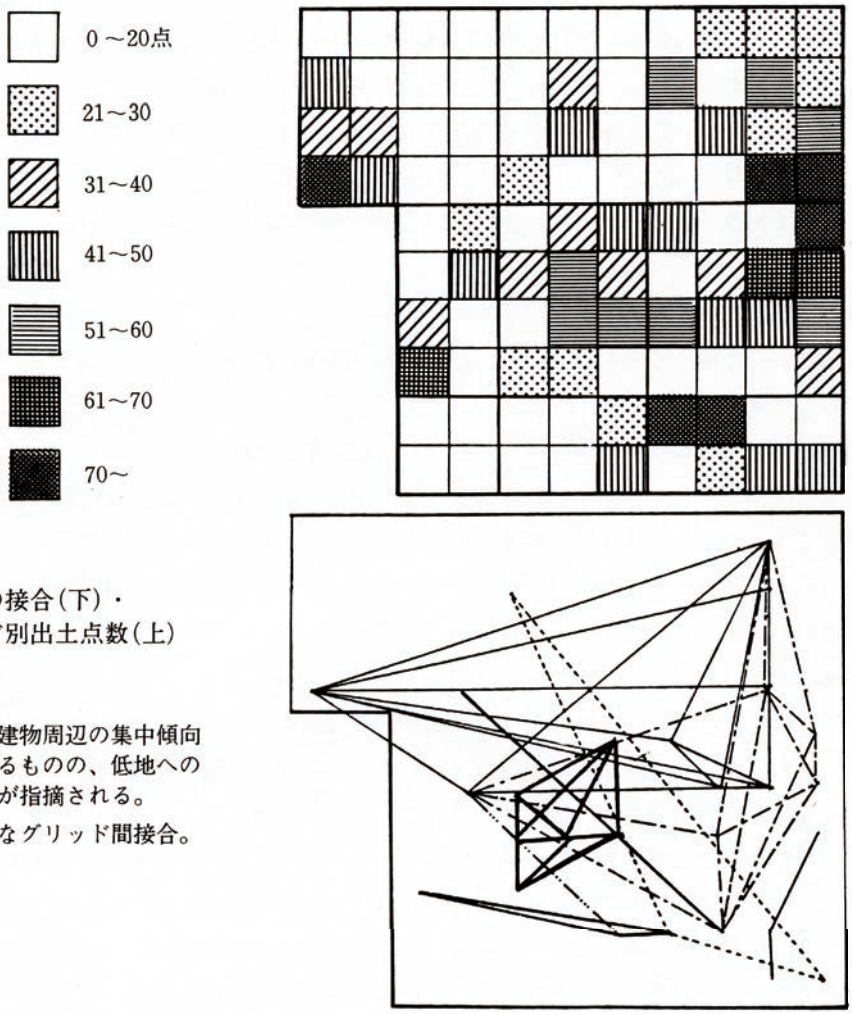
本遺構では最も豊富な資料を得た。甕は無文の有段口縁をもつものが目立ち、60・61の様な能登形に類するものが加わる。甕類の出土は比較的乏しいと言え、蓋・高坏・器台等の供献関係土器が量的に充実している。蓋は、器厚薄く外反ぎみに強く開き、裾部径が大きくなるものと、紐・体部ともに部厚で小ぶりのものの二種が主体である。68は台付の鉢形土器との区分はややあいまいである。高坏では、椀形の坏底部をもつ77が唯一坏部の形態が推されるもので、一担屈曲したのち、外反して長く伸びる口縁がつくものと思われる。他に、有段脚となる器台（83）、ほぼ完形で出土した台付長頸壺（78）が検出されている。また、竪穴状遺構の下底部よりの出土であ

るが、本遺構に伴うと考えられる石鏃（第23図）が一点検出されている。凝灰岩製と思われ、長身で抉りの比較的浅いロケット形を呈するものである。長さ 3.7cm、幅 1.9cm、厚さ 0.5cm、重さ 2.1g を計る。

以上、全体を概述したが、遺物の希少さや、遺存状況の悪さ等から、特に類別は行なわなかった。甕形土器にみる有段口縁の在り方や、台付長頸壺、装飾器台等共伴遺物の形態的特徴から、ほぼ月影Ⅱ式期に比定しうるものと考えられる。

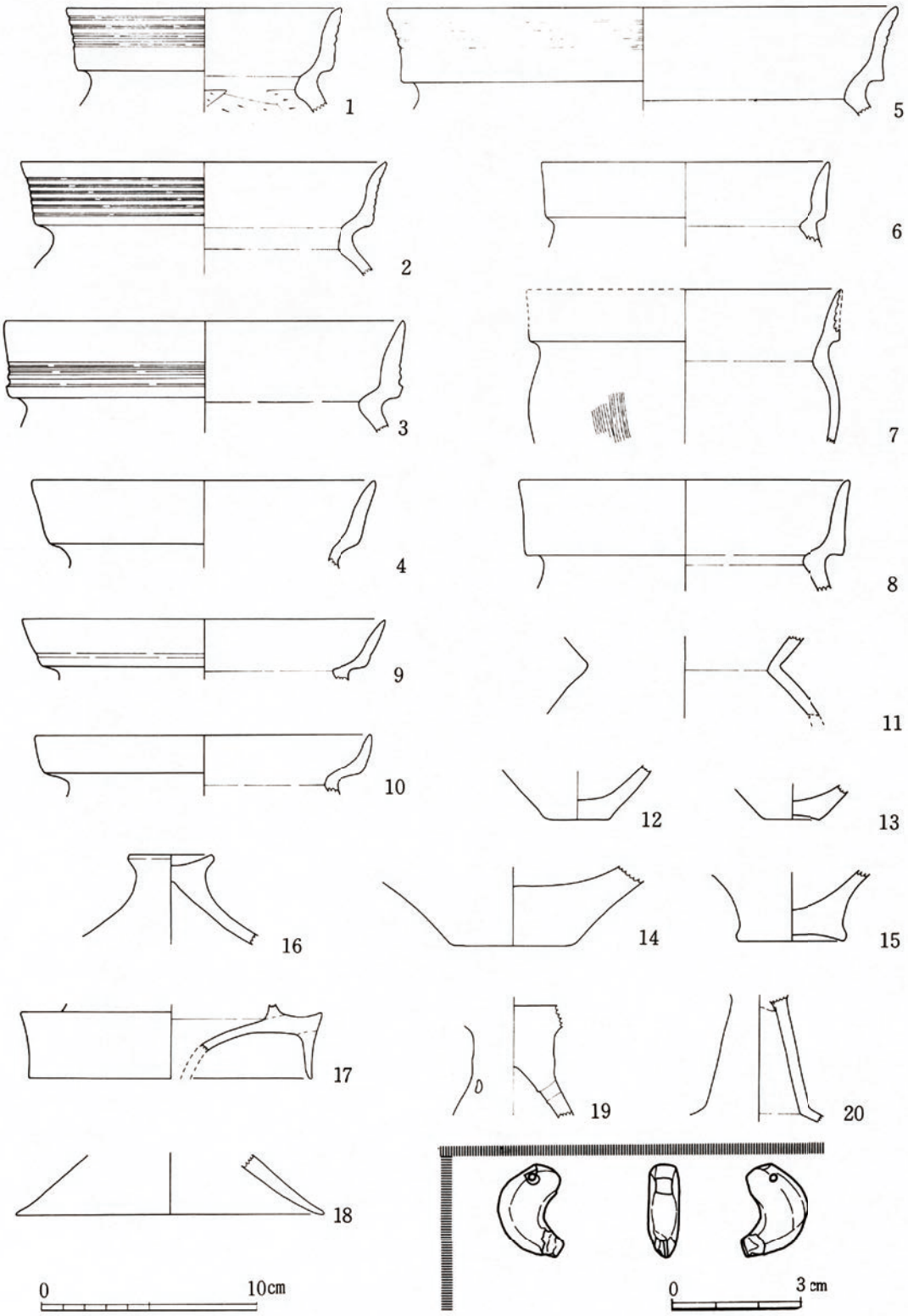


第23図　方形周溝状遺構出土石鏃（S＝1／1）

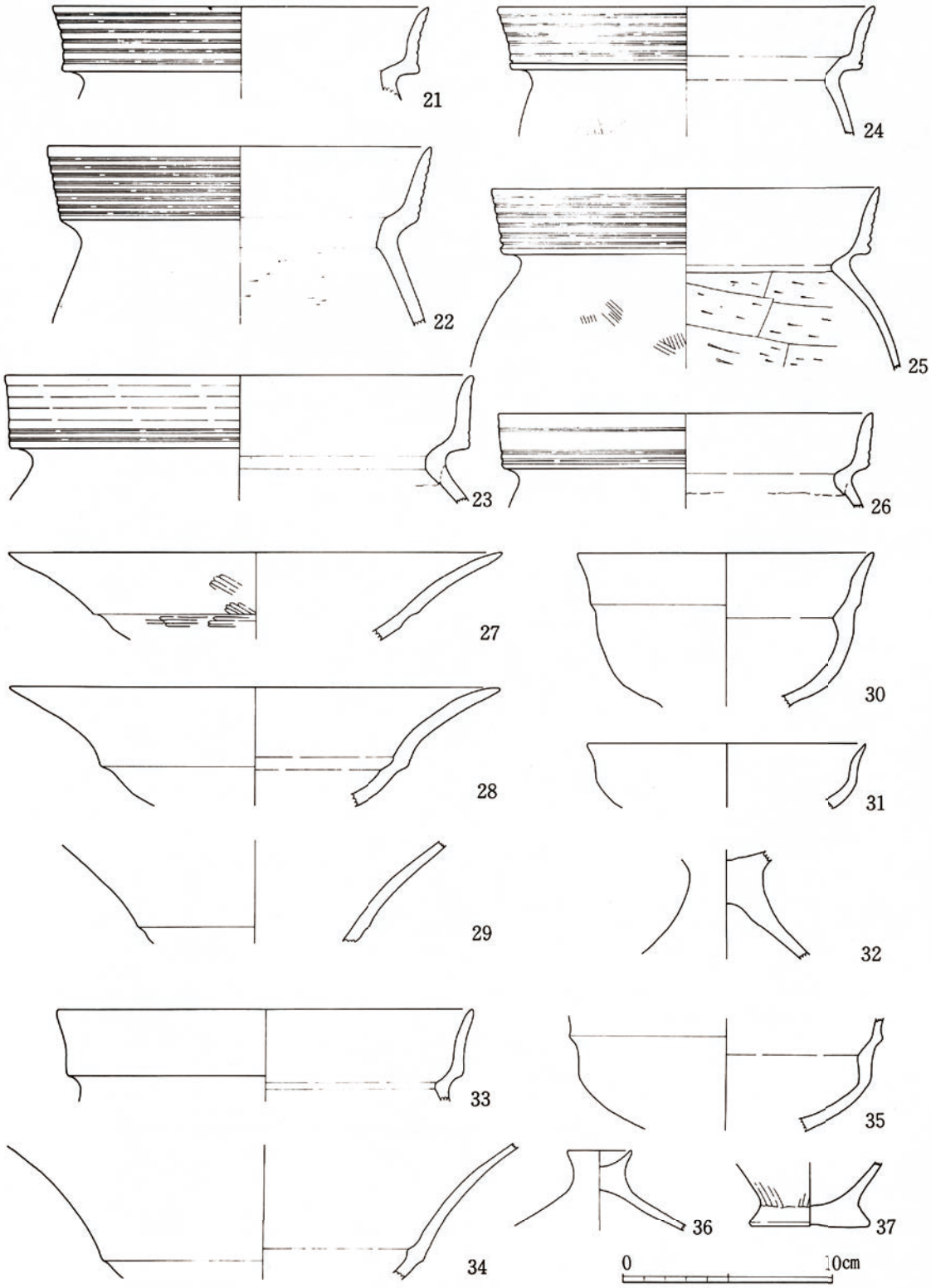


第24図
須恵器の接合（下）・
グリッド別出土点数（上）
概念図

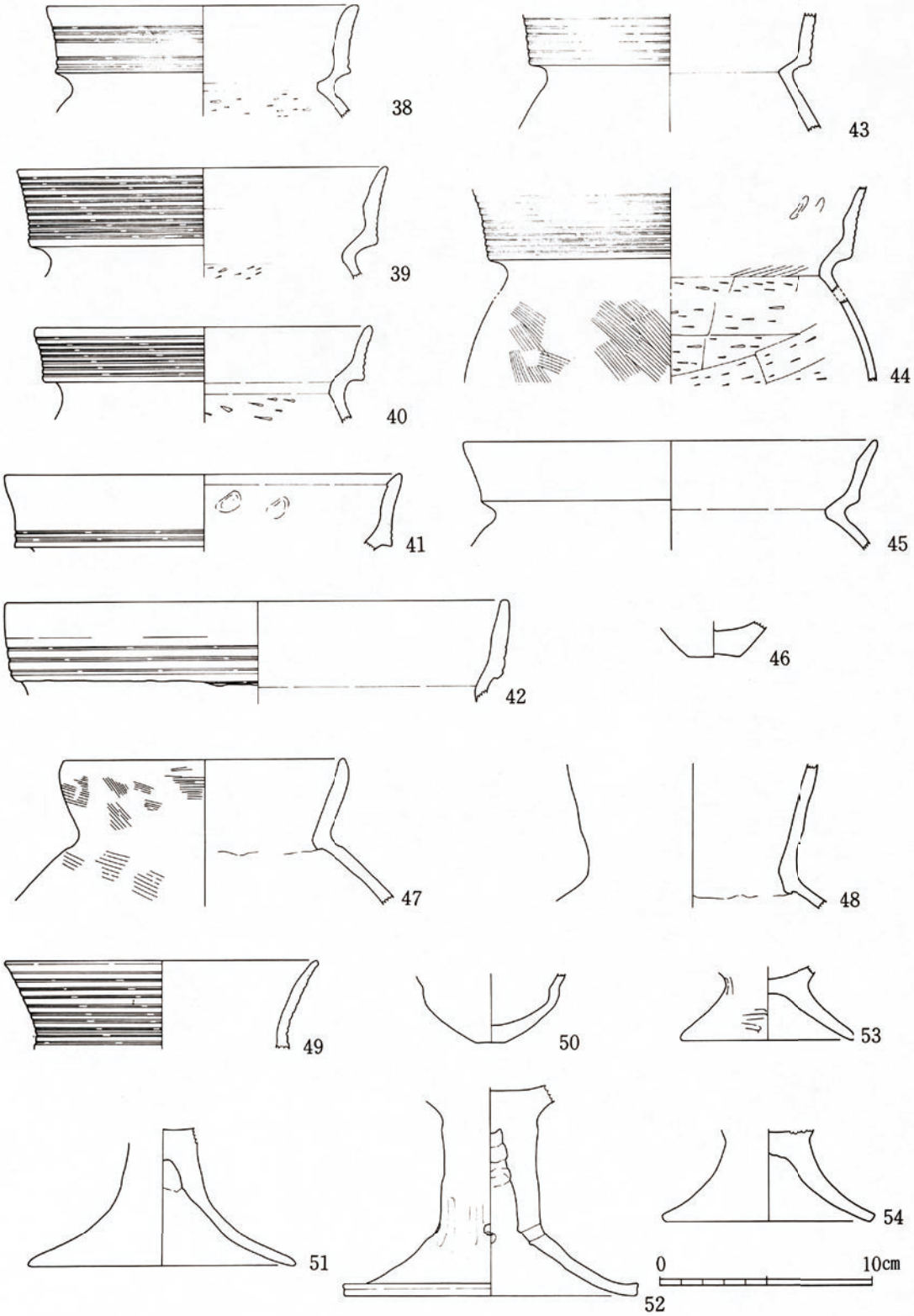
（上）掘立建物周辺の集中傾向はあるものの、低地への流れが指摘される。
（下）広汎なグリッド間接合。



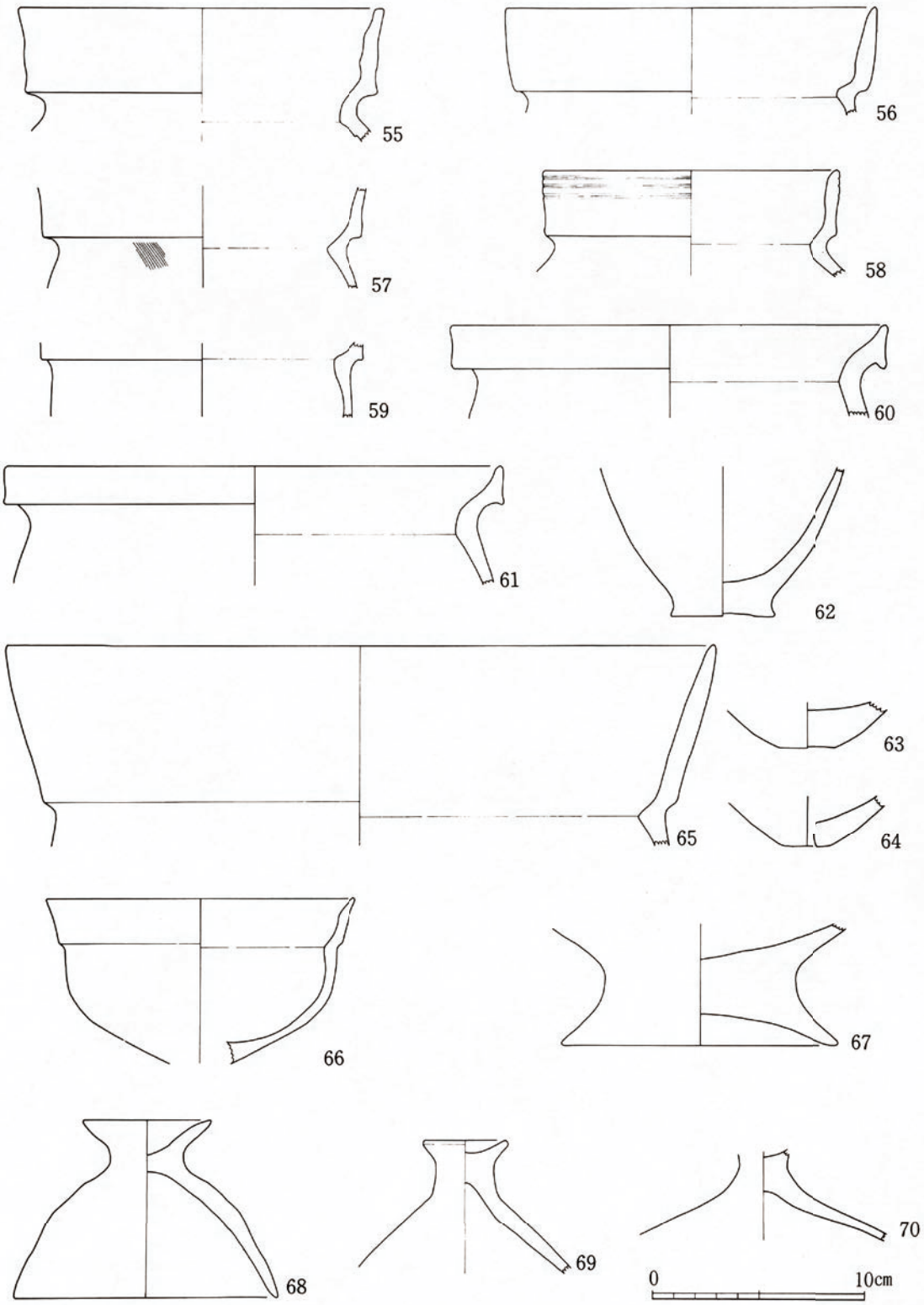
第25図　3号b－d溝出土遺物実測図



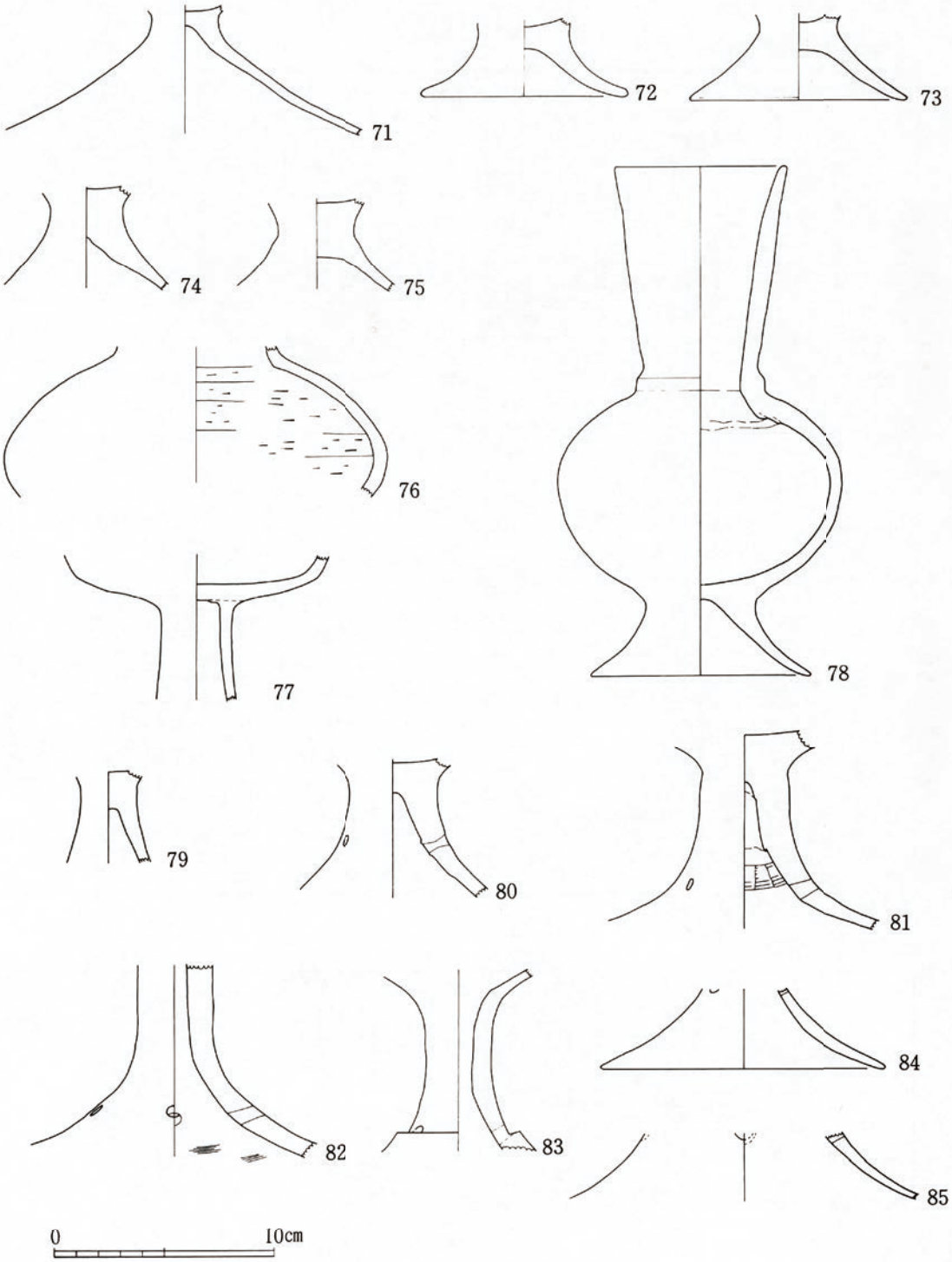
第26図　3号a溝・10号溝出土遺物実測図



第27図　10－２号溝出土遺物実測図



第28図　方形周溝状遺構出土遺物実測図



第29図　方形周溝状遺構出土遺物実測図

土器観察表（1）

3号b-d（第25図）

番号	器種	法量(cm)	成形及び調整	色調	胎土	焼成	備考
1	甕	口径 12.8	口縁部：外／擬凹線3を確認・内／ヨコナデ 頸部：外／ヨコナデ・内／ヘラケズリ	淡灰褐色	砂粒並	やや不良	
2	甕	口径 17.2	口縁部：外／擬凹線6を確認・内／不明 頸部：外／不明・内／ヘラケズリ	淡灰褐色	砂粒密	不良	
3	甕	口径 18.6	口縁部：外／擬凹線を確認認・内／不明 頸部：外／ヨコナデ・内／ヘラケズリ	外／橙灰褐色 内／灰白色	砂粒密	やや不良	
4	甕	口径 16.0	不明	淡黄褐色	砂粒密	不良	
5	甕	口径 23.8	口縁部：外／擬凹線4を確認・内／不明	外／淡灰褐色 内／橙灰褐色	砂粒密	不良	
6	甕	口径 13.4	口縁部：外・内／ヨコナデ（無文）	淡灰褐色	砂粒密	やや不良	
7	甕	口径 14.7	口縁部：不明 胴部：外／ハケ目・内／不明	外／橙灰褐色 内／灰白色	砂粒密	やや不良	胴部外面にススト付着
8	甕	口径 15.4	口縁部：不明 頸部：外／ヨコナデ・内／不明	淡橙灰褐色	砂粒密	不良	
9	甕	口径 17.0	口縁部：外／擬凹線1を確認・内／不明 頸部：外／ヨコナデ・内／不明	淡灰褐色	砂粒並	不良	
10	甕	口径 15.6	口縁部：不明 頸部：外／ヨコナデ・内／不明	淡赤褐色	砂粒並	やや不良	
11	甕	—	口縁部：外／ヨコナデ・内／不明 頸・胴部：不明	淡黄褐色	砂粒粗	やや不良	胴部外面にススト付着 胴破損部は接合痕
12	底部	底径 5.8	不明	外／淡赤褐色 暗黄褐色 内／暗黄褐色	砂粒密	やや不良	
13	底部	底径 2.6	不明	淡灰褐色	砂粒密	やや不良	
14	底部	底径 5.4	不明	淡黄褐色	砂粒密	やや不良	
15	底部	底径 5.0	不明	外／淡灰褐色 黒色 内／淡赤褐色	砂粒密	やや不良	
16	蓋	つまみ径 4.0	不明	淡橙灰褐色	砂粒粗	不良	
17	装飾器台	—	不明	淡橙灰褐色	砂粒粗	やや良	接合痕2
18	脚部	裾部径 14.4	不明	淡灰褐色	砂粒並	やや不良	
19	高坏脚部	—	不明	淡橙灰褐色	砂粒粗	やや良	透し孔2を確認 （径0.2cm）
20	脚部	—		淡灰褐色	砂粒並	やや不良	

3号a溝（第26図）

21	甕	口径 18.0	口縁部：外／擬凹線6 内／受部ヨコナデ（その他は不明） 頸部：外／ヨコナデ・内／不明	外／淡灰褐色 黒色 内／淡灰褐色	砂粒並	不良	外面にススト付着
22	甕	口径 18.4	口縁部：外／擬凹線8 内／受部ヨコナデ（その他は不明） 頸部：外・内／ヨコナデ 胴部：外／不明・内／ヘラケズリ	外／淡灰褐色 内／淡橙灰褐色	砂粒並	不良	
23	甕	口径 22.4	口縁部：外／擬凹線6・内／不明 頸部：不明	淡灰褐色	砂粒密	不良	頸部に接合痕1
24	甕	口径 18.0	口縁部：外／擬凹線6・内／ヨコナデ 頸・胴部：外／ヨコナデ→ハケ目 内／ヘラケズリ	外／淡黄褐色 内／淡褐色	砂粒並	やや不良	
25	甕	口径 18.4	口縁部：外／擬凹線6・内／不明 頸・胴部：外／ヨコナデ→ハケ目 内／ヘラケズリ	淡灰褐色	砂粒並	不良	外面にススト付着
26	甕	口径 17.9	口縁部：外／擬凹線3を確認・内／不明 頸部：不明	淡赤褐色 淡灰褐色	砂粒並	不良	頸部に接合痕1
27	高坏	口径 19.6	坏部：外／ヘラミガキ・内／不明	外／黒灰色 内／橙灰褐色	砂粒粗	やや良	

番号	器種	法量(cm)	成形及び調整	色調	胎土	焼成	備考
28	高坏	口径 23.4	不明	淡灰褐色	砂粒粗	やや不良	
29	高坏	—	不明	外／黒灰色 内／淡橙灰褐色	砂粒粗	やや不良	
30	鉢	口径 12.2	不明	淡灰褐色	砂粒粗	やや良	
31	鉢	口径 13.3	不明	淡黄灰色	砂粒密	やや不良	
32	蓋	—	つまみ部：外・内／ヘラミガキ 裾部：外／ヘラミガキ・内／不明	外／淡黄灰色 黒色 内／淡黄灰色 つまみ部内面／黒色	砂粒粗	やや不良	

10号溝（第26図）

33	甕	口径 19.8	口縁部：不明 頸部：外／ヨコナデ・内／不明	淡赤褐色	砂粒密	不良	
34	高坏	—	不明	橙灰褐色	砂粒粗	不良	
35	鉢	—	不明	淡橙灰褐色	砂粒粗	やや不良	
36	蓋	つまみ径 3.0	不明	淡灰褐色	砂粒密	やや不良	
37	底部	底径 5.6	外／ヘラミガキ・内／不明	淡赤褐色 灰白色	砂粒並	やや良	内外面にススト付着

10-2号溝（第27図）

38	甕	口径 14.6	口縁部：外／擬凹線5を確認・内／ヨコナデ 頸・胴部：外／ヨコナデ・内／ヘラケズリ	淡灰褐色	砂粒密	やや良	外面にススト付着
39	甕	口径 17.3	口縁部：外／擬凹線11・内／ヨコナデ 頸部：外／ヨコナデ・内／ヘラケズリ	淡灰褐色	砂粒密	やや良	
40	甕	口径 15.8	口縁部：外／擬凹線7・内／ヨコナデ 頸部：外／ヨコナデ・内／ヘラケズリ	淡灰褐色	砂粒密	やや良	外面にススト付着
41	甕	口径 18.6	口縁部：外／擬凹線2を確認 内／ヨコナデ→指頭圧痕	淡灰褐色	砂粒粗	良	外面にススト付着
42	甕	口径 23.8	口縁部：外／擬凹線3を確認・内／不明	外／橙褐色 淡灰褐色 内／淡灰褐色	砂粒密	やや不良	
43	甕	—	口縁部：外／擬凹線6を確認・内／不明 胴部：不明	淡灰褐色	砂粒密	やや不良	外面にススト付着
44	甕	—		淡灰褐色	砂粒密	やや良	
45	甕	口径 19.4	口縁部：不明 頸部：外／ヨコナデ・内／不明 胴部：不明	外／淡灰褐色 内／赤褐色 淡黒灰色	砂粒密	やや良	
46	底部	底径 2.4	不明	黒褐色	砂粒密	やや良	内外面にススト付着
47	壺	口径 13.2	口縁部：外／ハケ目（細）・内／不明 胴部：外／ハケ目（粗）・内／不明 （タタキ（？））	外／淡灰褐色 黒色 内／淡橙褐色	砂粒密	やや不良	接合痕1
48	壺	—	不明	淡灰褐色	砂粒密	やや不良	接合痕1
49	鉢	口径 14.6	口縁部：外／擬凹線10・内／不明	淡灰褐色	砂粒粗	やや不良	
50	小型鉢	—	不明	外／淡灰褐色 淡橙褐色 内／淡灰褐色	砂粒粗	やや不良	
51	高坏	裾部径 12.4	不明	外／淡灰褐色 淡橙褐色 内／淡灰褐色			
52	高坏	裾部径 13.6	脚部：外／ヘラミガキ 内／一部ナデ（それ以外は不明）	灰白色	砂粒粗	やや良	透し孔4（径0.5 cm） 外面に一部ススト付着
53	蓋	口径 8.0	つまみ部：不明 裾部：外／ヘラミガキ・内／不明	灰白色	砂粒密	やや不良	

番号	器種	法量(cm)	成形及び調整	色調	胎土	焼成	備考
54	蓋	口径 10.0	不明	淡灰褐色	砂粒密	やや不良	

1号土坑（第28図）

55	甕	口径 17.0	口縁部：外／ヨコナデ 内／ヨコナデ→指頭圧痕 頸部：外／ヨコナデ・内／不明	灰白色	砂粒密	やや良	接合痕1
56	甕	口径 17.4	口縁部：外／ヨコナデ ・内／不明	外／灰白色 内／淡橙灰褐色	砂粒密	やや不良	

方形周溝状遺構（第28図・第29図）

57	甕	—	口縁部：不明 頸・胴部：外／ヨコナデ→ハケ目 ・内／不明	淡灰褐色	砂粒密	不良	外面に一部スス付着
58	甕	口径 13.8	口縁部：外／擬凹線3を確認 ・内／不明 頸部：外／ヨコナデ ・内／不明	淡赤灰色	砂粒粗	やや不良	
59	甕	—	不明	灰白色	砂粒密	不良	
60	甕	口径 20.4	不明	淡灰褐色	砂粒粗	やや不良	
61	甕	口径 23.2	不明	外／淡灰褐色 内／灰白色	砂粒密	不良	
62	底部	底径 4.8	不明	灰白色	砂粒密	やや不良	
63	底部	底径 2.6	不明	灰白色	砂粒密	やや不良	
64	底部	底径 2.5	不明	淡灰褐色	砂粒密	やや不良	底部穿孔（径1.0 cm）
65	鉢	口径 34.4	不明	淡黄褐色	砂粒密	やや不良	
66	鉢	口径 14.5	不明	外／淡橙灰褐色 内／淡灰褐色	砂粒密	やや不良	
67	台付底部	脚部径 13.0	不明	外／淡灰褐色 内／淡灰色	砂粒密	やや不良	
68	蓋	口径 12.6 つまみ径 6.0 器高 8.4	不明	淡灰褐色	砂粒粗	やや不良	
69	蓋	つまみ径 3.8	不明	外／淡灰褐色 内／淡灰褐色 黒灰色	砂粒粗	やや良	外面に一部スス付着
70	蓋	—	不明	灰白色	砂粒粗	不良	
71	蓋	—	不明	白色	砂粒密	不良	
72	蓋	口径 9.4	不明	淡灰褐色	砂粒粗	やや良	
73	蓋	口径 10.0	不明	淡灰褐色	砂粒密	やや不良	
74	蓋	—	不明	淡橙灰褐色	砂粒粗	やや不良	
75	蓋	—	不明	白色	砂粒粗	やや不良	
76	壺	—	胴部：外／不明・内／ヘラケズリ	灰白色	砂粒粗	やや不良	
77	脚台部	—	不明	淡灰褐色	砂粒粗	やや不良	接合痕1
78	台付壺	口径 7.8 脚部径 10.0 器高 23.4	不明	灰白色	砂粒並	やや不良	
79	高坏脚部	—	不明	淡黄褐色	砂粒粗	やや不良	
80	高坏脚部	—	不明	外／淡橙灰褐色 内／淡黄褐色	砂粒粗	やや良	透し孔3（径0.6 cm）
81	高坏脚部	—	脚部：外／不明 ・内／ナデ ・ハケ目	灰白色	砂粒粗	やや良	透し孔3 （径0.5 cm～0.8 cm）
82	高坏脚部	—	脚部：外／不明 ・内／一部にハケ目確認	灰白色	砂粒粗	やや良	透し孔3を確認 （径0.7 cm）
83	高坏脚部	—	不明	外／灰白色 黒灰色 内／淡灰褐色	砂粒粗	やや不良	透し孔2を確認 （径0.6 cm）
84	高坏脚部	裾部径 13.0	不明	淡黄褐色	砂粒粗	やや不良	透し孔1を確認
85	高坏脚部	—	不明	灰白色	砂粒粗	やや不良	透し孔1を確認

(2) 古墳時代後期～平安時代の遺物

本遺跡より出土する須恵器は、大半が平安時代中期に属する製品で、器種も坏蓋・有台坏・無台坏・無台盤・有台皿・無台埦・有台埦・徳利形小瓶・広口鉢・擂鉢・直口壺・双耳瓶・甕と豊富に存在する。上記の時期以外の須恵器は古くは6世紀後葉頃から9世紀前葉頃までの製品が出土しているが、出土量は僅少で須恵器総数の2割程度である。以下に古墳時代より順に説明する。

12～18は6世紀後葉～7世紀後葉に位置付けられる。12～14は口縁部立ち上がりの有る坏身。14は底部付近にヘラ削りを施し、口縁部立ち上がりはしっかりした形態で、須恵器では最も古い製品と思われる。12・13は口縁部立ち上がりが縮小する製品で7世紀代に入る製品。17・18は口縁部に返りを持つ坏蓋で、12・13に後続する時期の製品と考える。

19～25・126・127は吉岡康暢氏の須恵器編年[1]における第1段階Ⅰ期に位置付けられ、8世紀前葉の所産である。27～34・128は戸津5号窯式期頃の製品で、8世紀後葉～9世紀前葉頃の所産と考えたい。

1・3～8・35～103は平安時代中期の所産である。坏蓋は無鈕（1）の製品で、口縁部の折り返しは微弱である。有台坏は底径が縮小する傾向に有り、体部下端の屈曲はなだらかな製品。無台坏は身の深いタイプ（41）と身の浅いタイプ（46・47）が存在するが、いずれも器肉を薄く仕上げる。無台盤はほぼ扁平なものに統一され、体部が長くのびる製品は存在しない。有台皿は断面台形を呈す長い高台をもつ製品が主体的であるが、57のようなひしゃげた高台を持つ新しい傾向の製品も存在する。無台埦は底部付近にヘラ削りを施す製品が1点存在する。有台埦は大形・中形の製品が存在し、高台の形態は長く外にふんばるものが多い。以上の坏蓋・有台坏・無台坏無台盤等の須恵器的器種については、坏蓋が無鈕化する段階[2]以降の製品ではあるが、これらの器種の終焉期と考える戸津35号窯式期の製品は存在せず、戸津9号窯式期の段階で当遺跡の製品は消滅する。これに対して、須恵器的器種の終焉に伴って主体的な器種となる有台皿・無台埦・有台埦等の土師器的器種については、その大半の製品がそれらの器種の出現する段階[3]に位置付けられる製品であり、退化傾向にある製品は有台皿の中に僅かに認められる程度である。以上の様相を総体的に考えれば、戸津54号窯の段階～戸津44号窯の段階に位置付けられるだろう。

土師器は無台埦・有台埦・小形甕・長胴甕の器種が存在する。104～117は平安時代中期、上記の須恵器に伴う時期の所産と考えたい。有台埦は内面黒色処理した製品が半数近くを占め、高台の形態も長く外にふんばる製品である。甕類はいずれも口縁部が逆くの字状を呈する形態である。9～11は上記の土師器より後出する製品。これらは1号井戸より出土する一括遺物で、黄灰褐色を呈す焼成良の製品である。無台埦は大きめの底部にやや身の浅い体部がつくタイプで、底面に回転糸切り痕を残す粗雑なナデ調整の製品。有台埦は通常の輪高台から外傾する体部を持ち、全面を粗雑なナデ調整する製品。これらの様相は田嶋氏の土師器編年[4]におけるⅦ期に比定できる。

以上の須恵器・土師器の他に灰釉陶器・緑釉陶器・瓦が存在する。いずれも平安時代中期の所産と考えられる。[5]

(1) 吉岡康暢「第三部第二章　奈良平安時代の土器編年」『東大寺領横江庄遺跡』松任市教育委員会・石川考古学研究会　19

(2) 南加賀古窯跡群において坏蓋が無鈕化する段階は戸津54号窯式であり、それ以降の須恵器は3段階6細分に編年可能である。つまり1段階は従来提唱されている（吉岡氏前掲論文）戸津9号窯式にあてはまるもので、その中で戸津54号窯式・戸津39号窯式に細分できる。2段階は戸津4号窯式にあてはまるもので、戸津35号窯式・戸津44号窯式に細分可能。3段階は戸津3号窯式にあてはまるもので、戸津56号窯式・戸津48号窯式に細分できる（望月精司・樫田誠『戸津－第4・5次発掘調査概要報告書』小松市教育委員会　1980)。この3段階編年は田嶋明人氏の提唱するV_1～V_3期にあてはまるものである（田嶋明人「Ⅳ章第2節　9世紀後半から13世紀にかけての土師器の変遷」『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター　1986)。

(3) 南加賀古窯跡群において有台皿が出現するのは、戸津54号窯式またはこれに先行する戸津31号窯式からであり、第1段階に生産のピークをひかえるが、戸津44号窯式には減少する。無台埦は戸津54号窯式には出現するが、一定量生産されるのは戸津39号窯式からである。有台埦は戸津39号窯式より出現するが、一定量生産されるのは戸津35号窯式期以降であり、無台埦とともに供膳器の主体的な器種を構成するようになる。

(4) 田嶋明人氏の前掲論文。

(5) 灰釉陶器は三ヶ月高台の内側の内彎が弱くなるもの（118）と低い高台を付すもの（119）とが存在する。折戸53号窯式に比定できる。緑釉陶器（135）はやや外展する高台の内側に浅い凹みを入れる有段の貼付高台の形態で、青灰色の硬質の素地に緑色釉が底面を除いた部に施されている。この製品も灰釉陶器とほぼ同時期の製品と考えて妥当だろう。

(3) 中世以降の遺物（第33図－13～19、第34図－１～18）

中世以降の出土遺物としては、加賀古窯製品・越前古窯製品・珠洲古窯製品及び、中世土師器や中国製の青磁・白磁類、幕末の若杉古窯製品の焼物、他にキセル・硯等が包含層より出土している。しかし、それらの量は多くない。第１次調査で、(第36図－13・14・17・18、第37図－１・３・６・７）が出土し、他は第２次調査時の出土である。

越前古窯製品（第36図－13～16、第37図－５）

図示したものは、甕の押印と壺の口縁部分であり、他に器形のわかるものや押印はなかった。（第36図－13）は、縦線に正格子を組み合せたものであり、(同図－14・15）は、「メ」印に縦・横線を組み合せたものである。(同図－16）は、縦線に斜線を組み合せたものである。(第37図－５）は、壺の口縁部分である。口径12.6cmをはかり、外面はヨコナデを施し、内面下半には、面取り様のおさえ痕が残っている。これは、14世紀代の所産と思われる。他に、甕片が若干出土している。

加賀古窯製品（第37図－４）

加賀古窯の製品として図示したものは、片口鉢であるが、他に甕の小片が数点出土している。この片口鉢は、内外面ともヨコナデ調整を行っていて、小砂粒を多く含んでいる。焼成は良好であり、指頭で片口を造っている。

珠洲古窯製品（第36図－17～19）

図示したものは、擂鉢片であるが、その他に甕・壺片と思われるものが数点出土している。擂鉢片は、いずれも口唇部に櫛目波状文がめぐっているものであり、珠洲古窯第Ⅴ期（室町時代中期、15世紀頃）の所産であろう。

その他、焼成の悪い擂鉢片（第37図－１～３）が認められるが、その生産地は不明である。

中世土師器（第37図－６～９）

６６は口径7.0cm、８は6.2cmであり、いずれも肉厚である。７は口径8.0cm、９は8.0cmでこちらはやや薄手のタイプである。６と８及び図示しなかった２点には、内底から口縁部にかけて、タール状になったススが付着していたので灯明皿として使用したのではなかろうか。

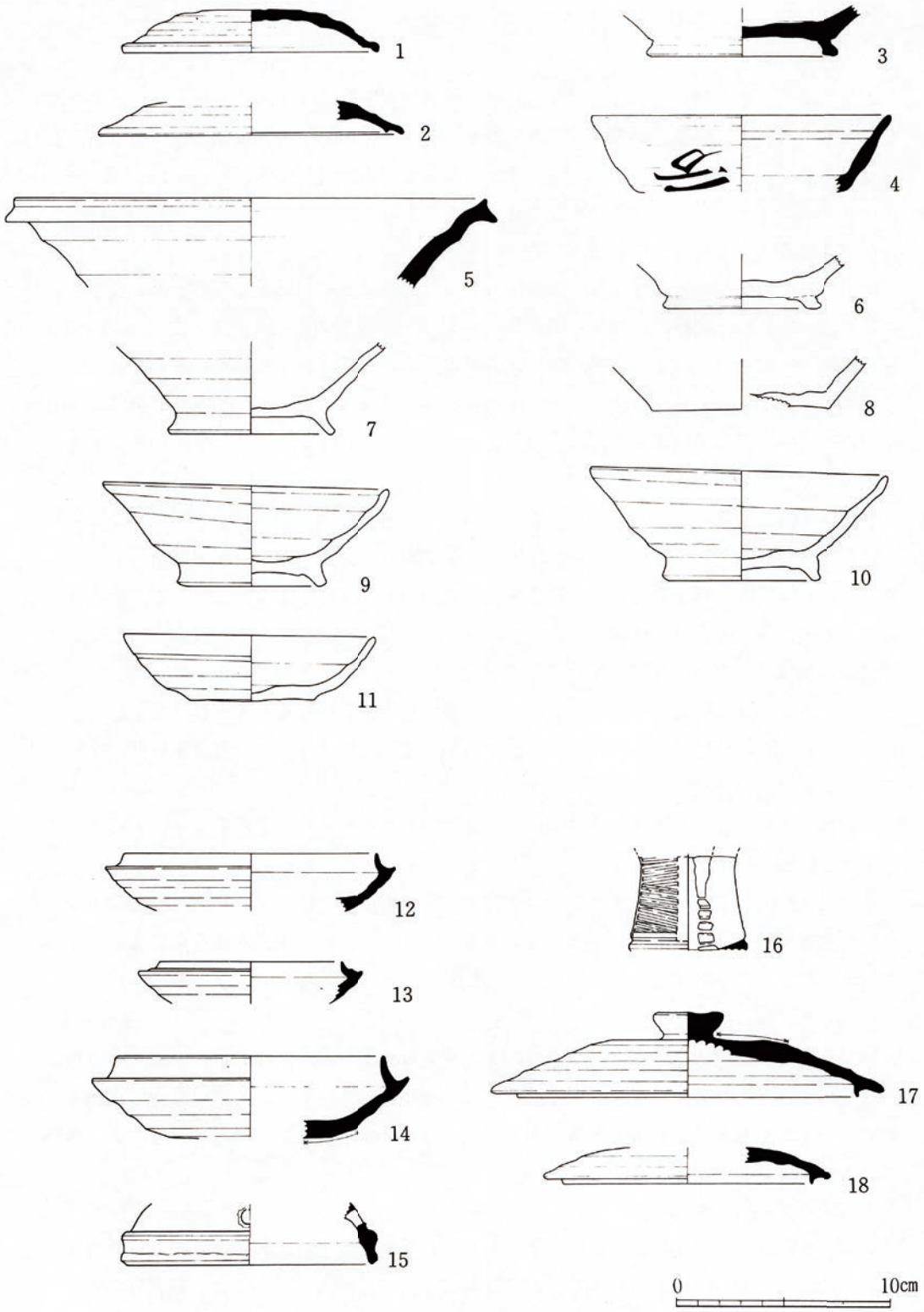
舶載磁器（第37図－10～13）

10は、口縁部が玉縁状になっているもので、やや青緑がかった白磁である。定窯系の製品であろう。12・13ともシノギハ文を有する碗で、13に比べて12は、そのシノギハ文の幅が細くなっている。いずれも龍泉窯系青磁であろう。11は、口径14.0cmをはかる碗である。色調は、内外とも褐色を呈している。

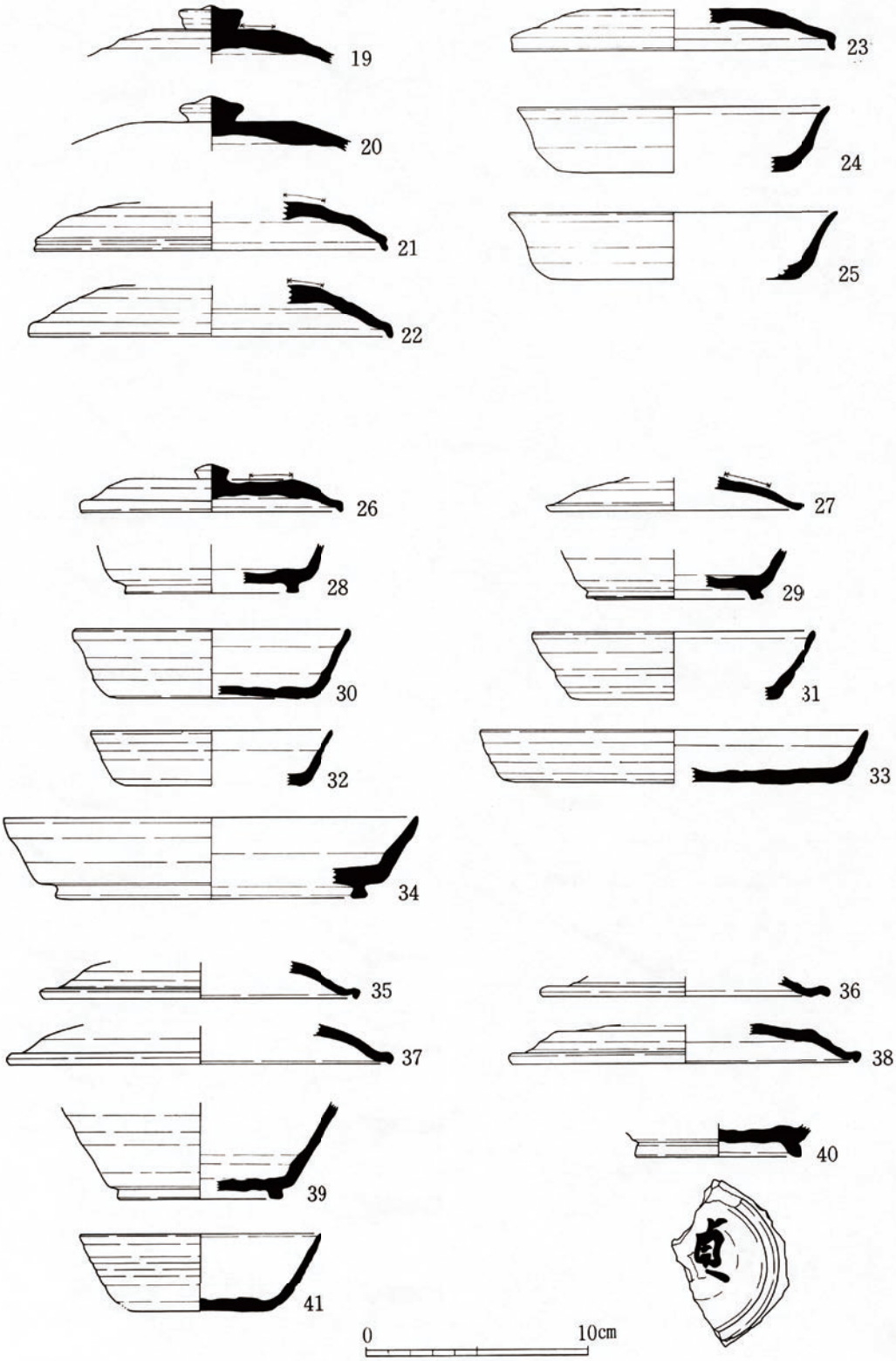
若杉古窯製品（第37図－14・15）

いずれも幕末の文化８年に開窯し、藩窯となった再興九谷焼系の若杉古窯の染付の製品である。

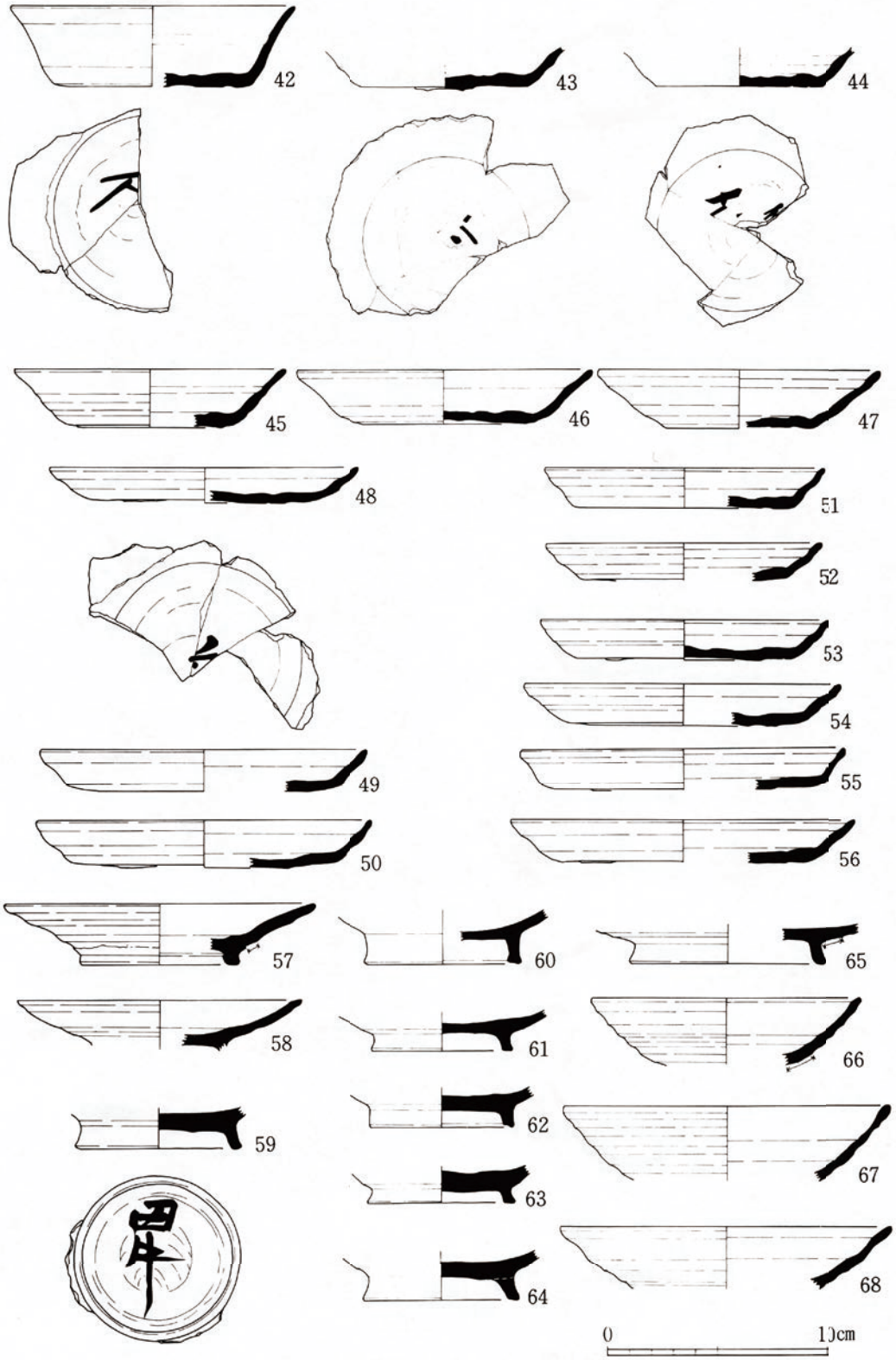
その他、キセル(第37図－16・17)、硯(同図－18)などが出土しているが、年代は不明である。



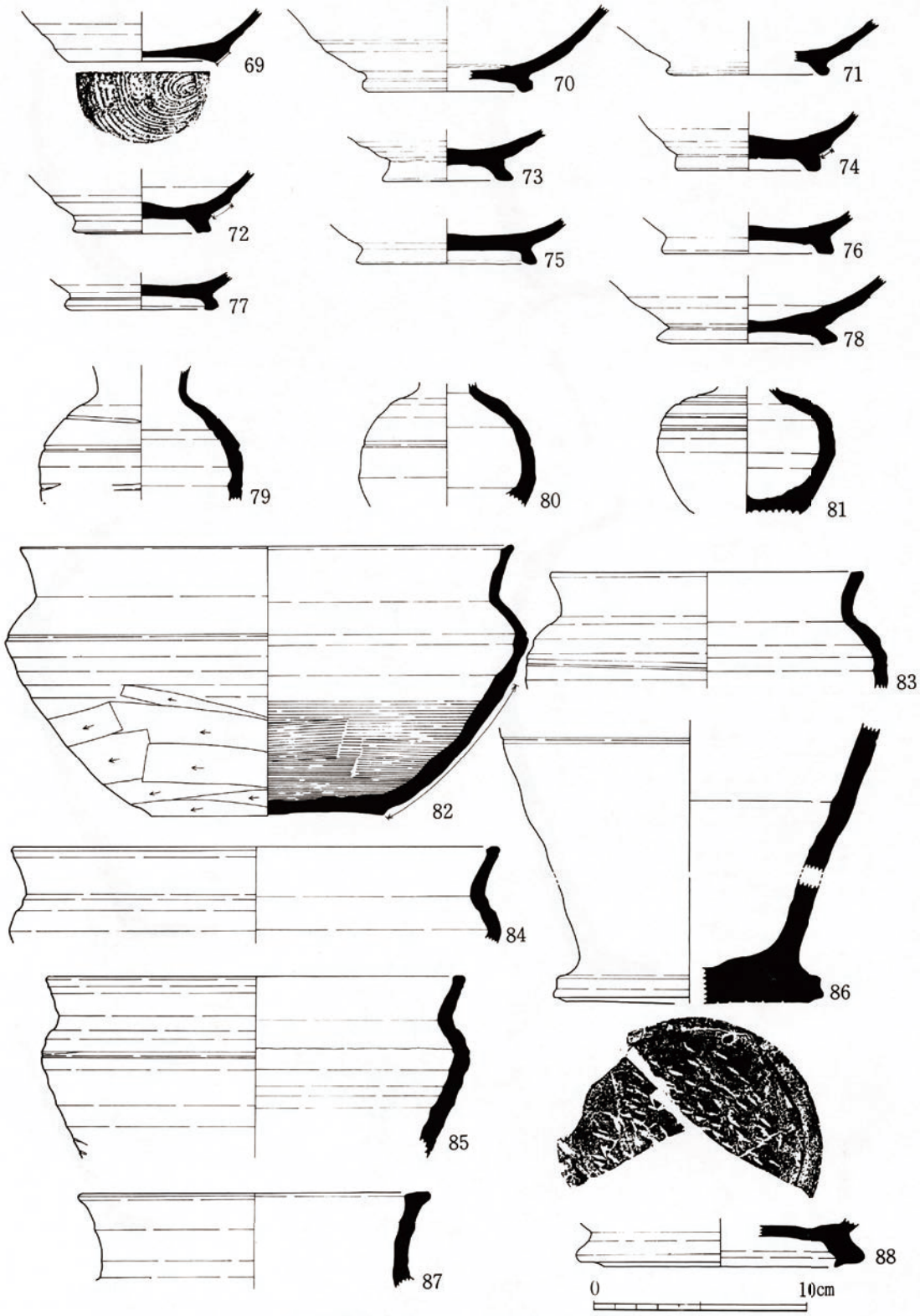
第30図　ピット・井戸出土土器及び包含層出土須恵器実測図



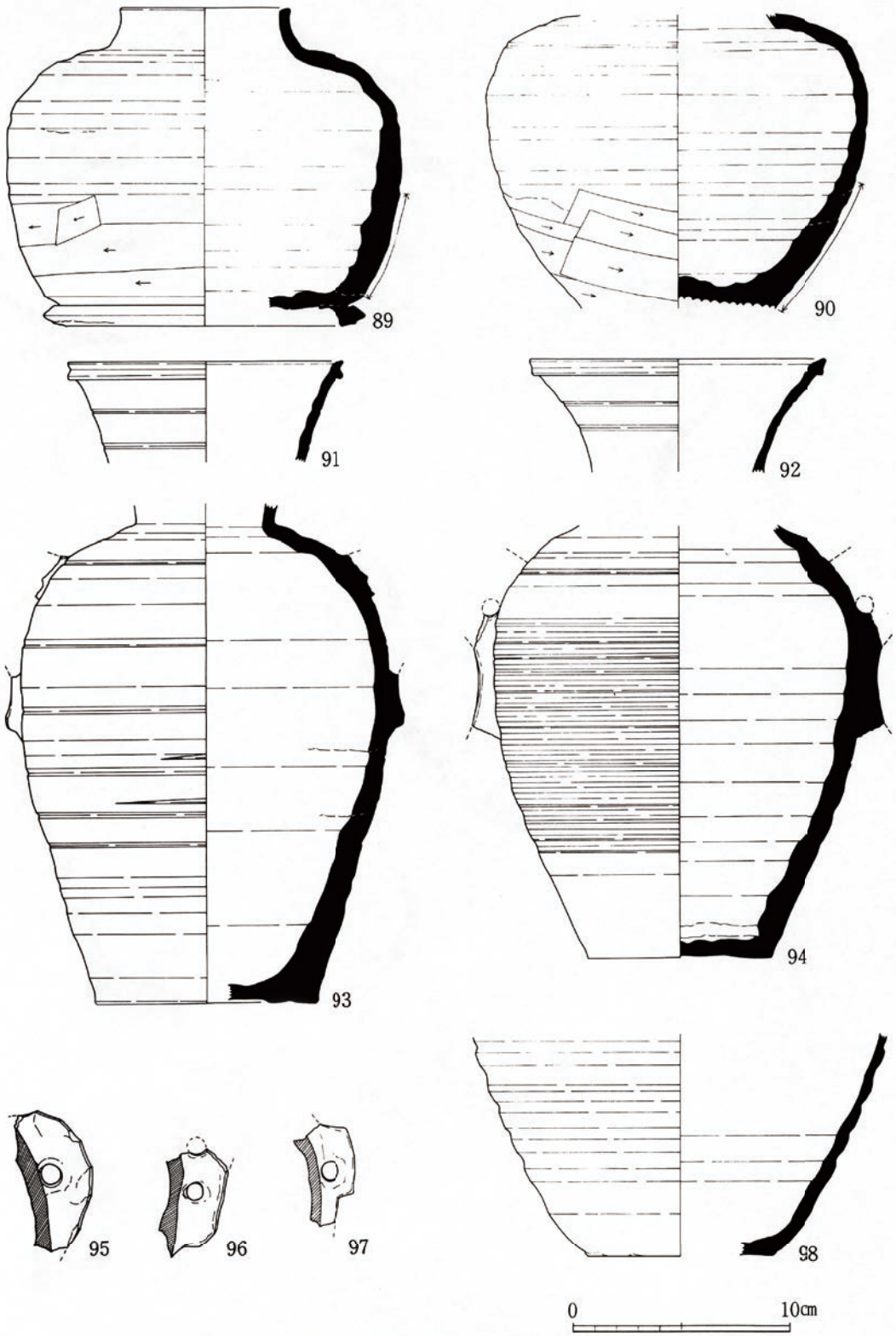
第31図　包含層出土須恵器実測図



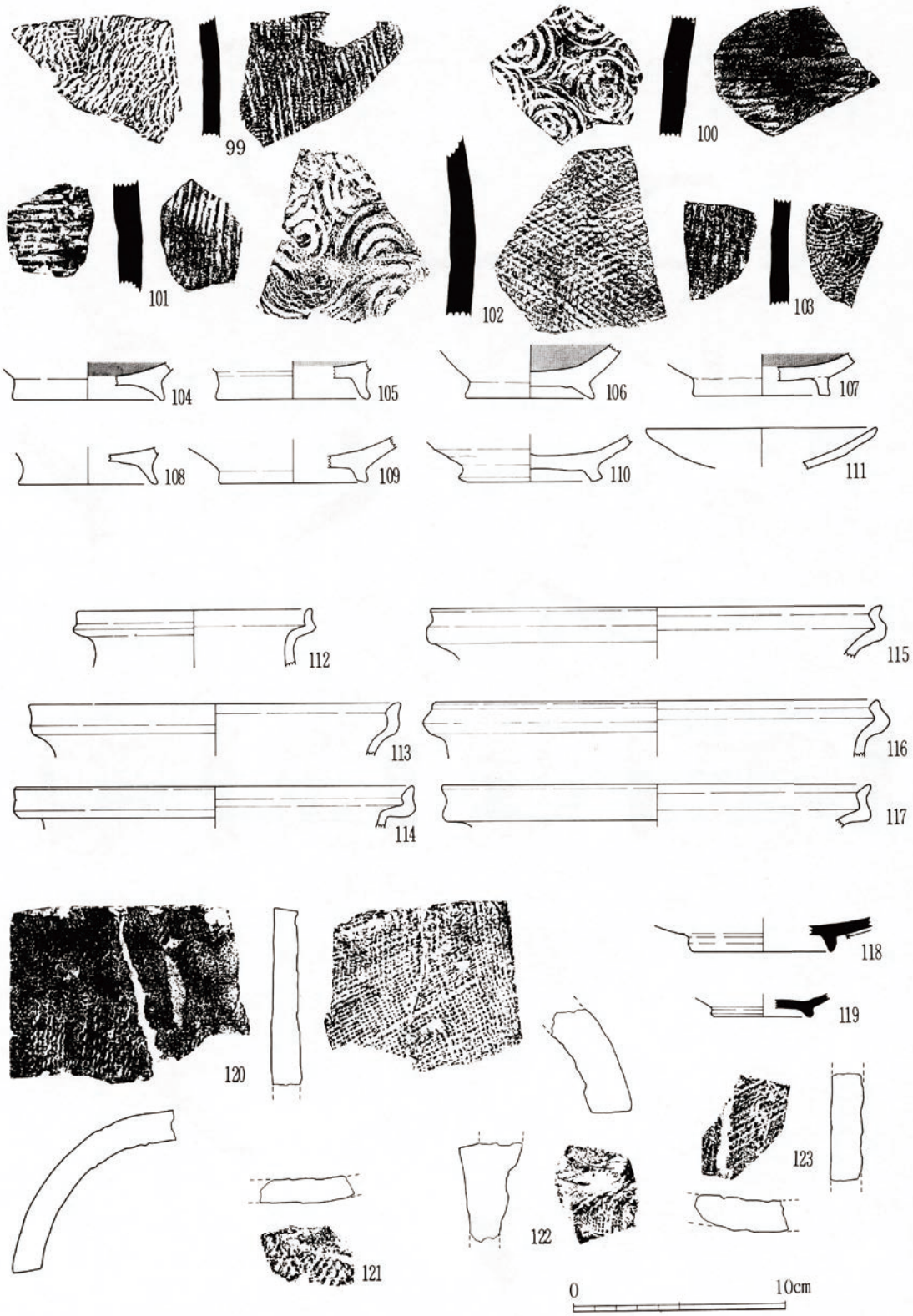
第32図　包含層出土須恵器実測図



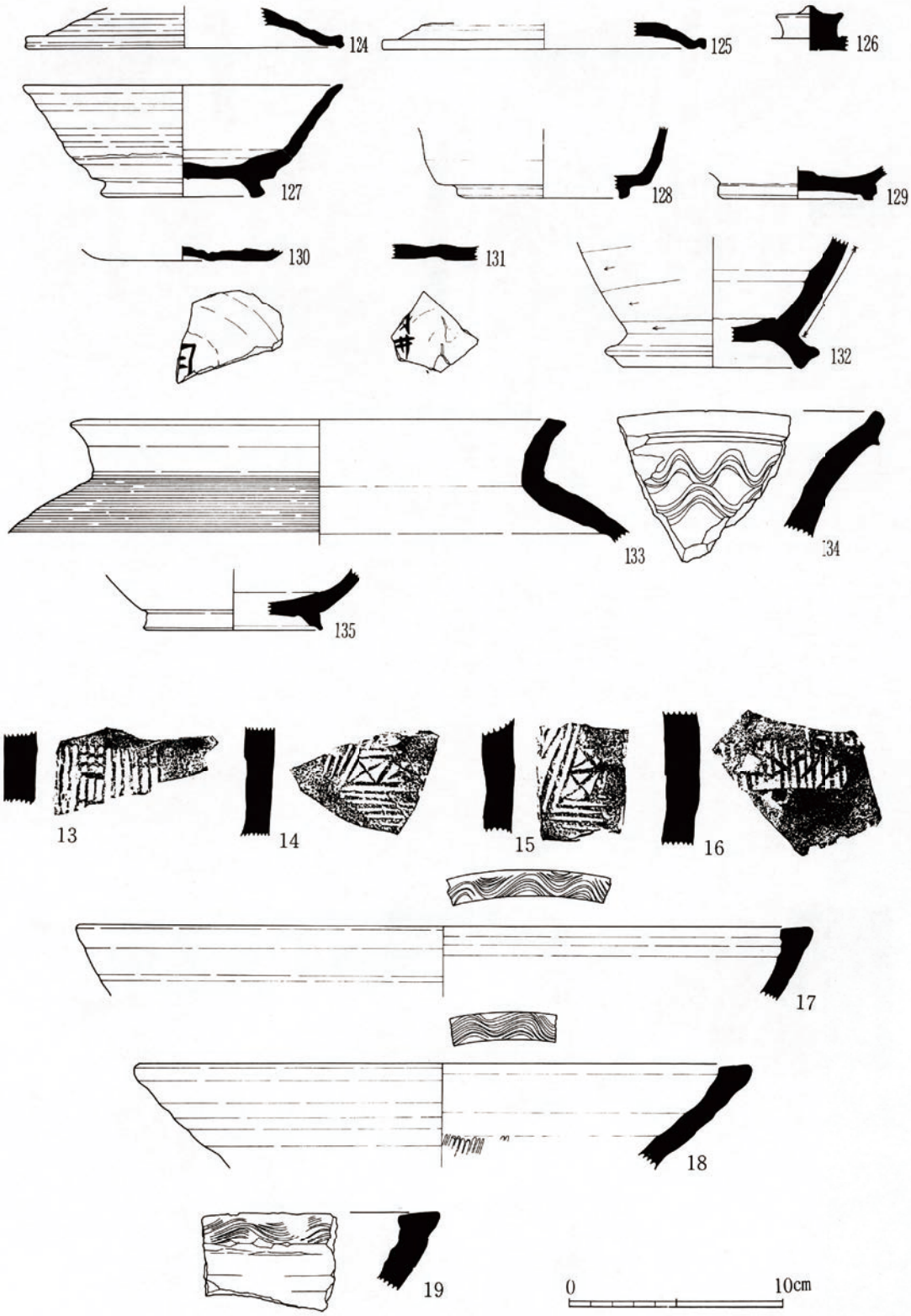
第33図　包含層出土須恵器実測図



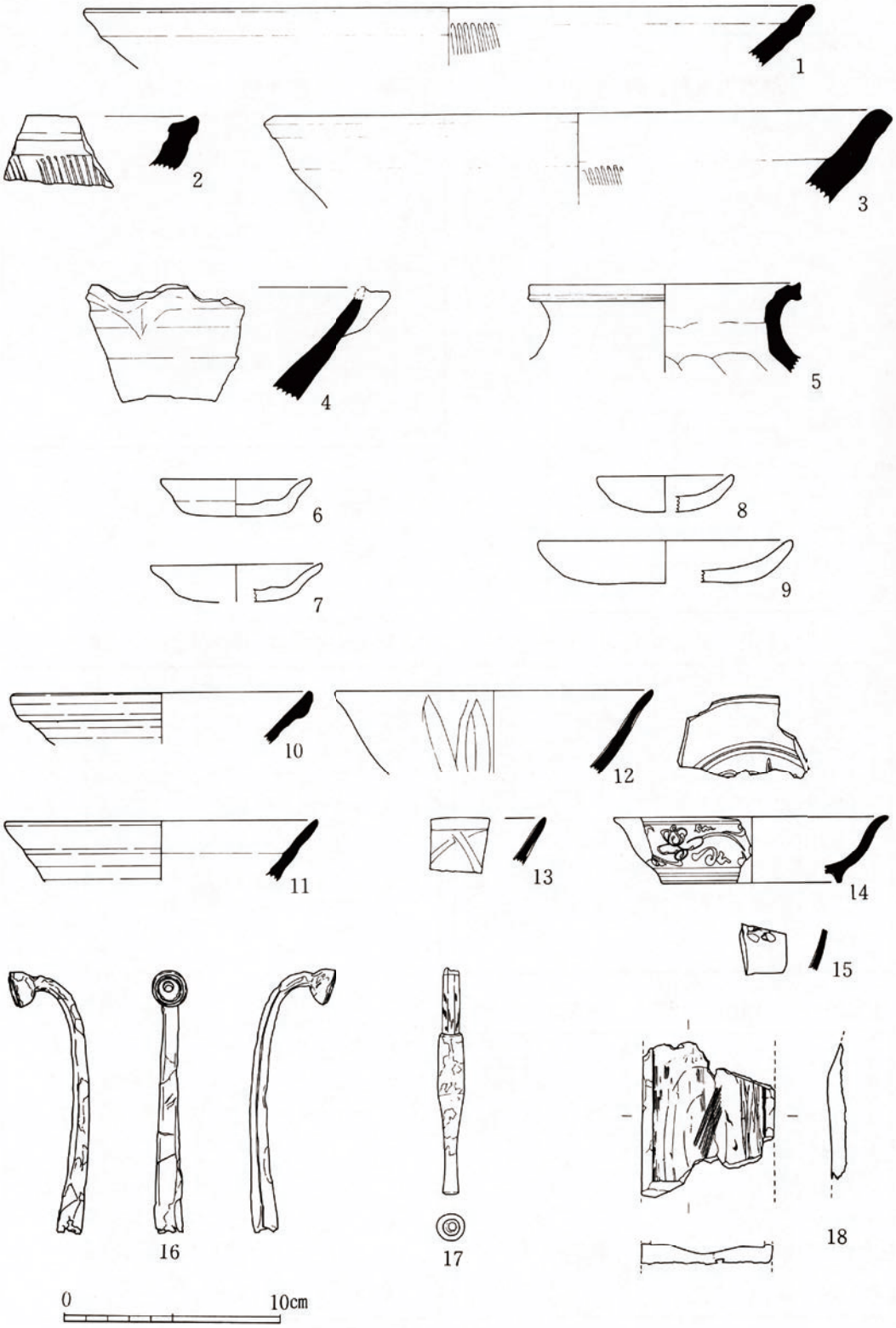
第34図　包含層出土須恵器実測図



第35図　包含層出土須恵器・土師器・灰釉陶器・瓦実測図



第36図　包含層出土須恵器・中世以降遺物実測図



第37図　包含層出土中世以降遺物実測図

土器観察表（2）

須恵器・土師器等土器色調一覧

須恵器	①	灰白色
	②	やや青味がかった灰白色
	③	青味がかった灰白色
	④	青味がかった灰色
	⑤	灰　色
	⑥	暗灰色
	⑦	青灰色
	⑧	やや暗い青灰色
	⑨	暗青灰色
	⑩	赤味がかった灰白色
	⑪	赤灰褐色
土師器	⑫	黄灰白色
	⑬	淡い橙灰白色
	⑭	やや淡い橙褐色
	⑮	赤褐色

須恵器・土師器等土器胎土一覧

須恵器	①	白色微砂粒を少量含む
	②	白色砂粒を通有量含む
	③	白色砂粒を多量含む
	④	小石・白色砂粒を少量含む
	⑤	小石・白色砂粒を多量に含む粗悪な胎土
	⑥	砂粒をほとんど含まない良質の胎土
	⑦	白色砂粒・小石を微量含むが、良質の胎土
土師器	⑧	微砂粒を少量含む良質の胎土
	⑨	砂粒を少量含む
	⑩	砂粒・小石を多量に含む粗悪な胎土

ピット内出土須恵器（第30図）

番号	器種	法量（cm）	成形・調整 切り離し痕	色調 胎土	焼成	備考
1	坏蓋	口径12.0 器高 2.0	ヨコナデ 回転ヘラ切り	② ①	やや良	内面にスミ付着（転用硯？） 柱穴群1
2	坏蓋	口径14.0	ヨコナデ	② ⑥	やや不良	2号掘立 P1出土
3	有台椀	底径 9.0	ヨコナデ 回転糸切り	② ①	やや良	4号掘立 P2出土
4	無台坏	口径14.0 底径 9.0	ヨコナデ	② ③	やや良	外面に「一万」の墨書有り 4号掘立 P5出土
5	瓶	口径22.0	ヨコナデ	⑧ ③	良	P25出土

ピット・井戸内出土土師器（第30図）

6	有台椀	底径 7.4	ヨコナデ ナデにより切り離し痕消去	⑭ ⑧	やや良	内外面にスス付着 6号掘立 P2出土
7	有台椀	底径 7.8	ヨコナデ 回転糸切り	④ ⑩	やや不良	3号掘立 P2出土
8	壷	底径 8.4	ヨコナデ	⑭ ⑩	やや不良	3号掘立 P2出土
9	有台椀	口径13.5 底径 7.0 器高 4.7	ヨコナデ	⑫ ⑧	やや良	1号井戸出土
10	有台椀	口径14.0 底径 7.4 器高 5.1	ヨコナデ 回転糸切り	⑫ ⑧	やや良	1号井戸出土
11	無台椀	口径11.8 底径 6.0 器高 3.1	ヨコナデ 右回転糸切り	① ⑧	やや良	1号井戸出土

包含層出土須恵器（第30図・第35図）

番号	器種	法量（cm）	成形・調整 切り離し痕	色調 胎土	焼成	備考
12	坏身	口径11.8	ヨコナデ	② ⑥	やや不良	
13	坏身	口径 8.4	ヨコナデ	⑦ ⑦	やや不良	
14	坏身	口径12.5 器高 3.8	底面付近ヘラ削り、他ヨコナデ	③ ⑦	やや良	
15	高坏	底径11.6	ヨコナデ	⑦ ⑥	やや良	
16	高坏		外面カキ目	① ①	やや良	三方または四方透し
17	坏蓋	口径16.0 器高 4.0	天井部ヘラ削り 他はヨコナデ 中央仕上げナデ	① ③	やや良	外面に自然釉付着、内面中央にスミ付着（転用硯？）
18	坏蓋	口径11.6	ヨコナデ、内面中央仕上げ、ナデ	① ⑥	良	外面に窯壁付着
19	坏蓋		天井部ヘラ削り ヨコナデ	① ⑦	良	内面にスミ付着
20	坏蓋		ヨコナデ	② ⑦	良好	外面に自然釉付着
21	坏蓋	口径16.0	天井部ヘラ削り ヨコナデ	① ⑥	良	外面に自然釉付着
22	坏蓋	口径16.4	天井部ヘラ削り 他はヨコナデ	① ⑦	良	
23	坏蓋	口径14.6	ヨコナデ	（内② 外⑦ ⑦	やや良	
24	無台坏	口径14.2 底径10.6 器高 2.9	ヨコナデ	② ①	やや良	
25	無台坏	口径15.0 底径11.2 器高 3.1	ヨコナデ	② ①	やや良	

番号	器種	法量(cm)	成形・調整 切り離し痕	色調 胎土	焼成	備考
26	坏蓋	口径15.8 器高 2.2	天井部ヘラ削り ヨコナデ 回転ヘラ削り	(内③ 外⑦ ⑦	良	外面に若干自然釉付着
27	蓋	口径11.2	天井部ヘラ削り ヨコナデ	③ ②	良	
28	有台坏	底径 7.8	ヨコナデ 回転ヘラ削り	② ⑦	良好	外面の一部に自然釉付着
29	有台坏	底径 8.0	ヨコナデ ナデにより切り離し痕消去	⑦ ②	良	外面の一部に自然釉付着
30	無台坏	口径12.4 底径 9.4 器高 3.2	ヨコナデ 回転ヘラ切り	(内② 外③ ①	良	外面の一部に自然釉付着
31	無台坏	口径12.8 底径 9.4 器高 3.1	ヨコナデ	② ①	やや良	
32	無台坏	口径11.0 底径 8.0 器高 2.5	ヨコナデ	① ③	やや良	
33	無台盤	口径17.6 底径14.4 器高 2.4	ヨコナデ 回転ヘラ切り	② ②	良	
34	有台盤	口径18.8 底径14.2 器高 3.7	ヨコナデ	② ②	良	
35	坏蓋	口径14.2	ヨコナデ	③ ④	良好	
36	坏蓋	口径13.0	ヨコナデ	② ①	良	
37	坏蓋	口径17.2	ヨコナデ	① ②	やや不良	
38	坏蓋	口径15.6	ヨコナデ 回転ヘラ切り	⑤ ⑤	良好	
39	有台坏	底径 7.2	ヨコナデ 回転ヘラ切り	④ ②	やや良	外面にスス付着
40	有台坏	底径 7.4	ヨコナデ 回転ヘラ切り	② ①	良	底面に墨書有り
41	無台坏	口径10.8 底径 6.4 器高 3.5	ヨコナデ 回転ヘラ切り	② ④	やや不良	
42	無台坏	口径13.0 底径 9.0 器高 3.7	ヨコナデ 回転ヘラ切り	⑤ ④	良好	底面に墨書有り 外面に自然釉付着
43	無台坏	底径 7.6	ヨコナデ 回転ヘラ切り	③ ④	良好	底面に墨書有り
44	無台坏	底径 7.6	ヨコナデ 回転ヘラ切り	(内⑥ 外⑤ ⑤	良好	底面に墨書有り
45	無台坏	口径12.4 底径 6.6 器高 2.7	ヨコナデ 回転ヘラ切り	② ①	やや良	
46	無台坏	口径13.6 底径 9.4 器径 2.5	ヨコナデ 回転ヘラ切り	⑦ ⑤	良好	口唇部に自然釉付着 底面に「＋」のヘラ記号有り
47	無台坏	口径13.0 底径 6.6 器高 2.7	ヨコナデ 回転ヘラ切り	③ ④	良好	口唇部に自然釉付着 底面に「#」のヘラ記号有り

番号	器種	法量(cm)	成形・調整 切り離し痕	色調 胎土	焼成	備考
48	無台盤	口径14.2 器高 1.7	ヨコナデ、内面中央に仕上げナデ 回転ヘラ切り	⑪ ②	やや不良	底面に墨書有り
49	無台盤	口径15.0 器高 1.9	ヨコナデ	③ ②	良	
50	無台盤	口径15.4 器高 2.2	ヨコナデ、内面中央に仕上げナデ 回転ヘラ切り	④ ④	良好	口縁部外面に自然釉付着
51	無台盤	口径11.8 器高 1.9	ヨコナデ 回転ヘラ切り	② ①	良	口縁部外面に自然釉付着
52	無台盤	口径14.8 器高 1.9	ヨコナデ 回転ヘラ切り	④ ④	良好	口縁部外面に自然釉付着
53	無台盤	口径13.2 器高 1.8	ヨコナデ 回転ヘラ切り	④ ②	良好	
54	無台盤	口径14.5 器高 1.9	ヨコナデ 回転ヘラ切り	② ①	良	
55	無台盤	口径14.8 器高 1.9	ヨコナデ、内面中央に仕上げナデ 回転ヘラ切り	② ④	良	口縁部外面に自然釉付着
56	無台盤	口径15.8 器高 2.0	ヨコナデ 回転ヘラ切り	② ②	良	口縁部外面に自然釉付着
57	有台皿	口径14.2 底径 7.2 器高 2.8	体部下端にヘラ削り、他はヨコナデ 回転糸切り	⑤ ③	やや良	内面にスミ付着
58	有台皿	口径15.0	ヨコナデ	⑤ ③	やや不良	底
59	有台皿	底径 7.6	ヨコナデ 回転糸切り	② ④	やや良	底面に「田中」の墨書有り
60	有台皿	底径 7.2	ヨコナデ 回転糸切り	② ②	やや良	
61	有台皿	底径 6.4	体部下端にヘラ削り、他はヨコナデ 回転糸切り	② ①	やや良	
62	有台皿	底径 6.4	ヨコナデ 回転糸切り	② ②	良	
63	有台皿	底径 6.6	ヨコナデ 回転糸切り	② ④	良	
64	有台皿	底径 7.2	ヨコナデ 回転糸切り	① ③	不良	
65	有台皿	底径 9.0	体部下端にヘラ削り、他はヨコナデ ナデにより切り離し痕を消去	② ②	やや良	
66	椀	口径12.4	体部下端にヘラ削り、他はヨコナデ	⑤ ①	良	口縁部外面に自然釉付着
67	椀	口径15.0	ヨコナデ	⑤ ①	良好	内面にスス付着
68	椀	口径15.2	ヨコナデ	⑥ ⑤	良好	
69	無台椀	底径 7.0	体部下端にヘラ削り、他はヨコナデ 右回転糸切り	② ①	良	

番号	器種	法量(cm)	成形・調整 切り離し痕	色調 胎土	焼成	備考
70	有台椀	底径 8.0	ヨコナデ 回転糸切り	② ④	良	
71	有台椀	底径 7.6	ヨコナデ	① ②	不良	
72	有台椀	底径 6.4	体部下端にヘラ消り、他はヨコナデ 回転糸切り	② ③	やや良	
73	有台椀	底径 6.2	ヨコナデ ナデにより切り離し痕を消去	⑧ ③	良好	外面に自然釉付着
74	有台椀	底径 6.8	体部下端にヘラ消り、他はヨコナデ ナデにより切り離し痕を消去	⑦ ②	良	底面に「－」のヘラ記号
75	有台椀	底径 8.4	ヨコナデ ナデにより切り離し痕を消去	① ④	やや不良	
76	有台椀	底径 8.2		① ②	不良	
77	有台椀	底径 7.2	ヨコナデ 回転糸切り	② ②	やや不良	
78	有台椀	底径 8.6	ヨコナデ 回転糸切り	⑤ ⑤	良	外面に自然釉付着
79	徳利形小瓶		ヨコナデ	① ①	良好	
80	徳利形小瓶		ヨコナデ	(内② 外③ ②	良好	外面に自然釉付着
81	徳利形小瓶	底径 5.0	胴部下半をヘラ消り、他はヨコナデ	(内② 外④ ⑥	良	外面一部に自然釉付着
82	広口鉢	口径 23.0 底径 11.0 器高 12.8	外面は体部下半～底面でヘラ消り、内面は体部上半以下でカキ目、他はヨコナデ ヘラ消りにより切り離し痕を消去	② ②	良好	胴部上半外面に自然釉付着
83	広口鉢	口径 14.8	ヨコナデ	② ①	良好	外面一部に自然釉付着
84	広口鉢	口径 23.0	ヨコナデ	(内① 外⑪ ②	やや良	
85	広口鉢	口径 19.8	ヨコナデ	② ①	良	
86	擂鉢	底径 12.8	ヨコナデ ナデにより切り離し痕を消去	① ④	良好	外面に自然釉付着
87	直口壺？	口径 16.8	ヨコナデ	② ②	良好	自然釉付着
88	壺	底径 13.6	ヨコナデ ナデにより切り離し痕を消去	③ ③	良好	内面に自然釉付着
89	短頸壺	口径 7.4 底径 15.0 器高 14.8	胴部下半にヘラ消り、他はヨコナデ ナデにより切り離し痕を消去	② ⑦	良好	底部付近に自然釉付着
90	壺		胴部下半にヘラ消り、他はヨコナデ	③ ②	良好	外面に自然釉付着
91	瓶	口径 12.8	ヨコナデ	⑥ ③	良好	外面に自然釉付着
92	瓶	口径 13.8	ヨコナデ	② ⑤	良好	内外面に自然釉付着
93	双耳瓶	口径 10.2	ヨコナデ	③ ②	良好	
94	双耳瓶	口径 8.6	胴部中位外面にカキ目、他はヨコナデ	③ ②	良好	外面に自然釉付着
95	双耳瓶		把手をヘラ削りにより面取り	③ ②	良好	外面に自然釉付着
96	双耳瓶		把手は雑な造り	③ ②	良好	外面に自然釉付着
97	双耳瓶		把手をヘラ削りにより面取り	① ⑦	良好	外面に自然釉付着
98	甕？	底径 8.5	ヨコナデ 回転糸切り	(内⑤ 外⑧ ⑤	良好	
99	甕		外面平行叩き、内面同心円文	④ ①	良好	
100	甕		外面平行叩き後ナデ、内面同心円文	(内② 外⑨ ⑥	良好	
101	甕		内外面に平行叩き	(内① 外⑩ ⑥	良好	
102	甕		外面斜格子叩ぎ 内面同心円文	② ②	良	
103	甕		外面平行叩き、内面細同心円文	(内② 外④ ②	良好	

包含層出土土師器（第35図）

104	有台椀	底径 7.0		⑫ ⑧	やや良	内面黒色処理
105	有台椀	底径 7.2	ヨコナデ ナデにより切り離し痕を消去	⑫ ⑧	やや良	内面黒色処理
106	有台椀	底径 6.0	ヨコナデ ナデにより切り離し痕を消去	⑫ ⑧	やや不良	内面黒色処理
107	有台椀	底径 6.4		⑬ ⑨	やや不良	内面黒色処理
108	有台椀	底径 6.4		⑫ ⑧	やや良	
109	有台椀	底径 6.0	ヨコナデ ナデにより切り離し痕を消去	⑫ ⑧	やや良	
110	有台椀	底径 6.8	体部下端にヘラ消り、他はヨコナデ 右回転糸切り	⑮ ⑨	やや良	
111	椀？	口径 11.0	ヨコナデ	⑮ ⑧	やや良	口縁部にススト付着
112	甕	口径 11.0	ヨコナデ	⑭ ⑧	やや不良	内面にスス付着
113	甕	口径 17.6	ヨコナデ	⑫ ⑧	やや良	
114	甕	口径 20.8	ヨコナデ	⑭ ⑨	やや良	

番号	器種	法量（cm）	成形・調整 切り離し痕	色調 胎土	焼成	備考
115	甕	口径21.4	ヨコナデ	⑬ ⑧	不良	
116	甕	口径21.0	ヨコナデ	⑬ ⑧	不良	
117	甕	口径20.4		⑫ ⑨	やや不良	

包含層出土灰釉陶器（第35図）

118	椀？	底径 6.7	体部下半ヘラ削り、内面ナデ	① ⑦	良好	体部内面に施釉
119	椀？	底径 4.6	ヨコナデ	① ⑥	良好	体部外面に一部施釉

包含層出土瓦（第35図）

120	丸瓦		凹面は布目を残す、凸面は縄目叩きを施した後ナデ調整、狭端面及び側面をヘラ削り	① ②	やや不良	行基葺式
121	平瓦		凹面は剥落しているため不明、凸面は縄目叩き	① ②	不良	
122	丸瓦		凹面は布目を残す、凸面はナデ側面はヘラ削り	① ②	やや不良	玉縁式
123	平瓦		凹面は糸切り痕布目痕を残す、凸面は剥落しているため不明、側面及び凹面端部をヘラ削り	① ①	不良	

第2次調査区域　包含層出土土器（第36図）

番号	器種	法量（cm）	成形・調整 切り離し痕	色調 胎土	焼成	備考
124	坏蓋（須恵器）	口径14.7	ヨコナデ	② ①	良好	口唇部に自然釉付着
125	坏蓋（須恵器）	口径15.0	ヨコナデ	② ②	良好	口唇部に自然釉付着
126	坏蓋（須恵器）		ヨコナデ	② ①	良	
127	有台坏（須恵器）	口径15.0 底径 7.7 器高 5.2	ヨコナデ ナデにより切り離し痕を消去	② ⑦	良好	外面に自然釉付着
128	有台坏（須恵器）	底径 8.0	ヨコナデ	② ⑦	良好	
129	有台椀？（須恵器）	底径 7.4	ヨコナデ 右回転糸切り	底部⑩ 他は② ①	やや良	
130	無台坏（須恵器）	底径 7.8	ヨコナデ 回転ヘラ切り	② ①	やや良	底面に墨書有り
131	無台坏？（須恵器）		ヨコナデ 回転ヘラ切り	② ①	やや良	底面に墨書有り
132	壺？（須恵器）	底径10.1	胴部下方でヘラ削り、他はヨコナデ ナデにより切り離し痕を消去	② ②	良	底部付近に自然釉付着
133	直口壺？（須恵器）	口径23.2	胴部上方でカキ目、他はヨコナデ	⑥ ①	良好	自然釉付着
134	甕（須恵器）		ヨコナデ	② ②	良好	口頸部外面に波状文、内外面に自然釉付着
135	有台椀（緑釉陶器）		ヨコナデ	⑨（素地） ⑥	良好	底面を除いた部分に施釉

Ⅳ　ま　と　め

第一小学校々地内漆町遺跡は、校舎建設当時における調査経緯はなく、従来ならば見逃しがちな既存建物敷地内での新たな遺跡発見であった。位置的に、漆町遺跡という大規模遺跡に隣接しており、それゆえの調査実施であったとも言える。本校を境に、東は広大な田園地帯を維持して、カドミ関連事業に伴って発見された多くの遺跡をひかえている。一方西は、小松市街地から東遷、拡大してくる宅地化がせまっている。現在の遺跡のひろがりは、あくまでも分布調査可能区域であったこと、或いは、その必要区域となったことによって認定された範囲である。都市計画上の線引きに呼応するかの如き遺跡分布の実態を読みとるとき、宅地化という小開発の蓄積によっていずれは充填される地域にこそ、今後の遺跡保存の大きな課題が残されていると言える。

さて、本遺跡の遺構・遺物であるが、ともに、概して稀薄であったと言える。ただ、確実に生活の場としての痕跡を充分にとどめるものであったのも事実である。時期的には、弥生時代末～中世或いは近・現代にまでいたる遺物が検出されており、周辺遺跡群とは基本的に同様な性格をもっている。そういった、長期にわたる生活の痕跡をもちつつ、本遺跡を舞台とした主要な生活の場は、ほぼ二つの段階が想定されるものと言えよう。

月影期のものについては、器面の損傷や、組成的不充分さによって、良好な資料とはいいがたいが、少ないながらも組成する各器種の特徴は、当該期の基本的な属性を備えている。方形周溝状遺構に関しても、今後の類例の検討がまたれるところである。

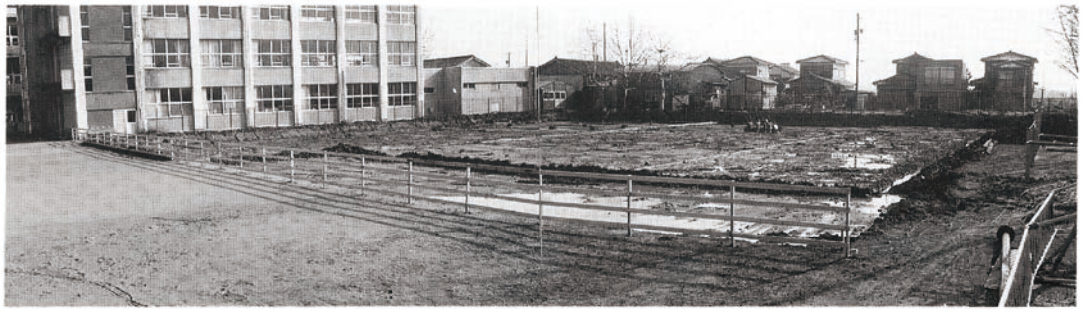
掘立柱建物跡では、第１・第２ブロックで、数点の須恵器が柱穴内から検出されており、ほぼ平安時代中期を中心に比定されそうである。一方、これに隣接する井戸からは、平安時代後期にあたると考えられる土師器が一括出土しており、両遺構に若干のひらきがある。井戸出土土器は井戸中位の埋没過程に属するもので、掘立建物自体に認められる執拗な建て替えの痕跡とともに考慮するとき、この時間幅が居住期間を示す可能性が高いと考えられる。

以上、本遺跡自体の遺存状況が決して良好とは言い難いことから、多くを語ることはできなかったが、漆町遺跡西端域での幅広い時期にわたる遺物の検出は、遺跡のひろがりを把握するうえで、重要な資料を提供したものと思われる。

引用・参考文献

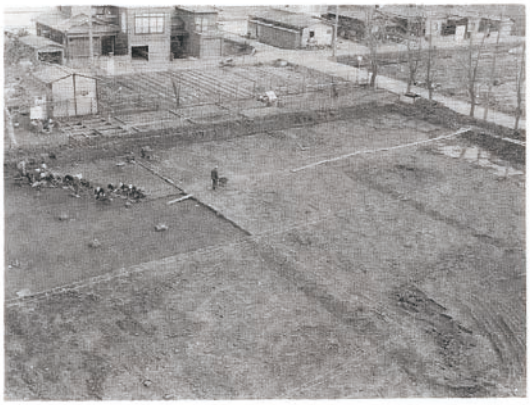
- 石川県立埋蔵文化財センター　1986『漆町遺跡Ⅰ』
- 金沢市教育委員会他　1985『金沢市新保本町東遺跡・西遺跡』金沢市文化財紀要54
- 上市町教育委員会　1981『北陸自動車道遺跡調査報告－江上Ａ遺跡・江上Ｂ遺跡』

図版1



第１次調査区調査前近景（上：グラウンド状態、下：盛砂除去状態）

図版2



発掘調査開始・遺構確認作業風景

遺構プラン検出状況（Ⅰ・Ⅱ区）

3号溝掘り下げ

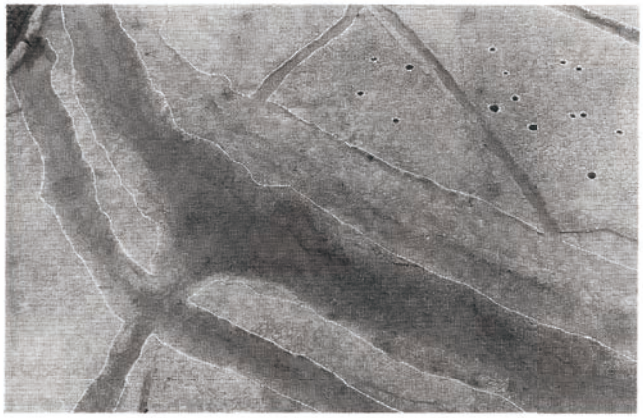
3号溝掘り下げ

3号溝検出状況

3号b 溝上層遺物

同左下底遺物

3号b 溝上層勾玉出土状態

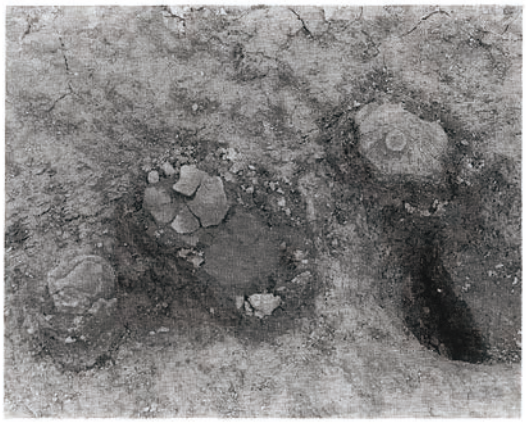


3号a～d 溝完掘状況

方形周溝状遺構遺物出土状況

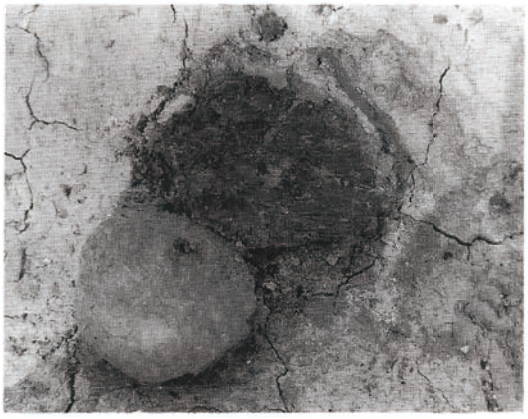
同左

図版4



方形周構状遺構遺物出土状況

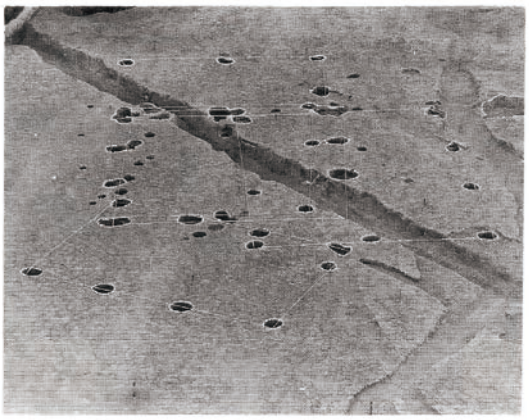
同上



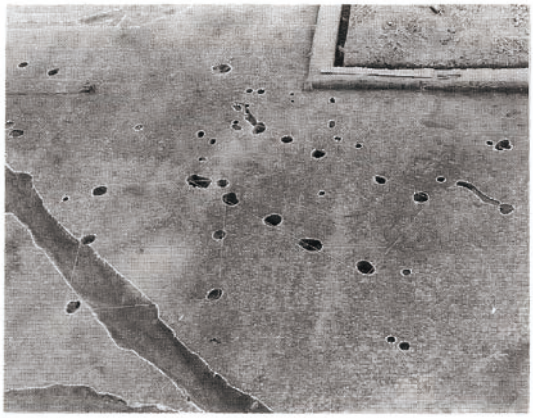
同左直下の炭化物片層

方形周溝状遺構、8・9号掘立完掘状況

10号溝



1～5号掘立柱建物跡と4号溝



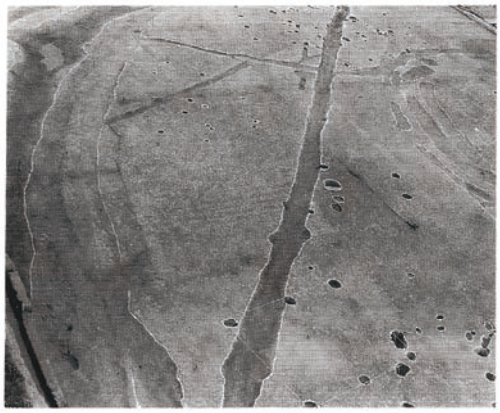
6号・7号掘立柱建物跡と4号溝

井戸粋検出状況

井戸内遺物出土状況

8号9号掘立柱穴内礎板出土状況

図版6



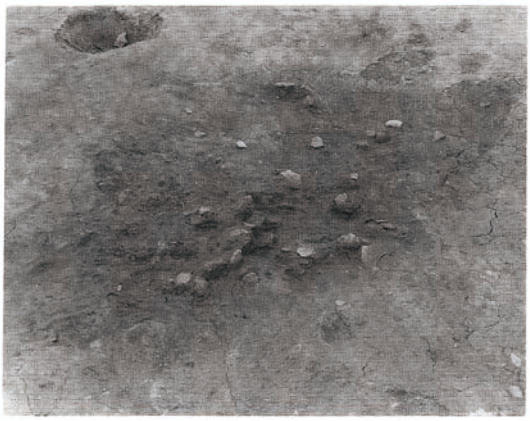
1次調査区完掘状況（北西より）

同上（北より）

2次調査区作業風景

同左・10号溝の掘り下げ

10-2号溝土層推積状況



1号土拡遺物出土状況

2次調査区
10-2号溝

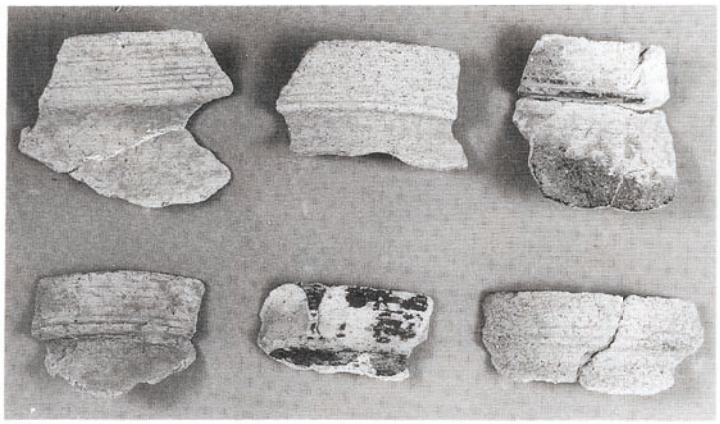
2次調査区
完掘状況

発掘調査参加者

図版8

3号b－d溝出土土器

同上

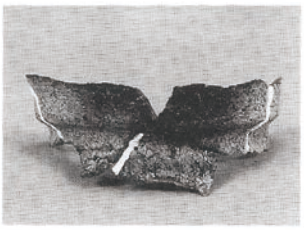


3号a溝出土土器

10号溝・10-$_2$号溝出土土器

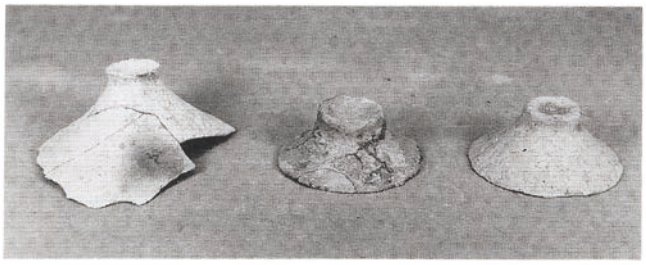
10-$_2$号溝出土土器

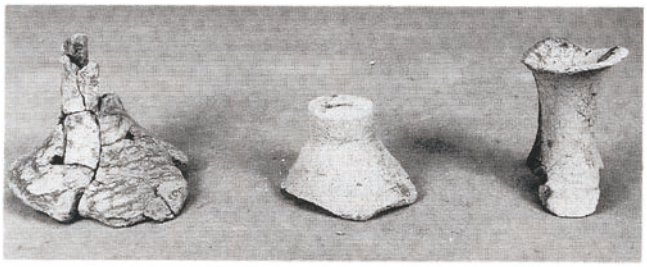
1号土抗出土土器



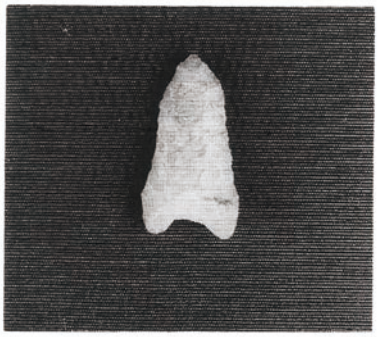
方形周溝状遺構出土土器

図版10

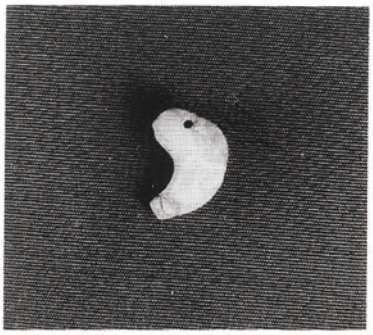




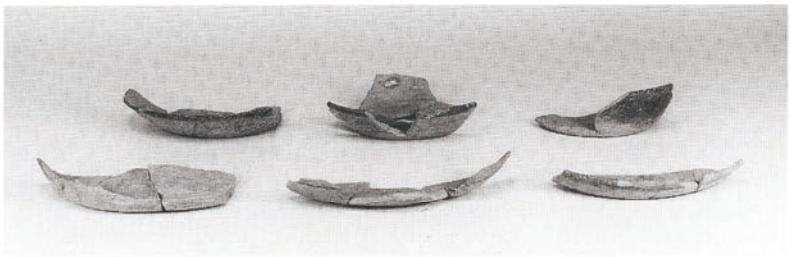
方形周溝状遺構出土土器



竪穴状遺構出土石鏃

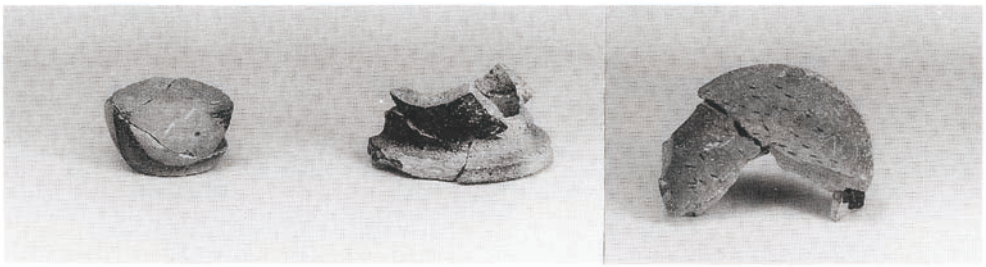


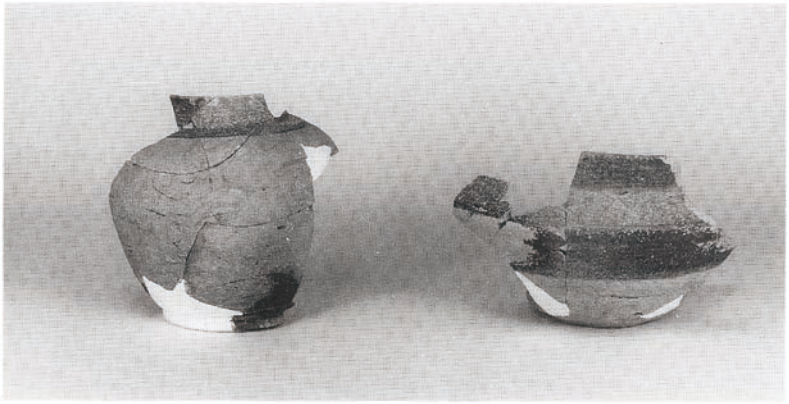
3号b－d溝出土勾玉

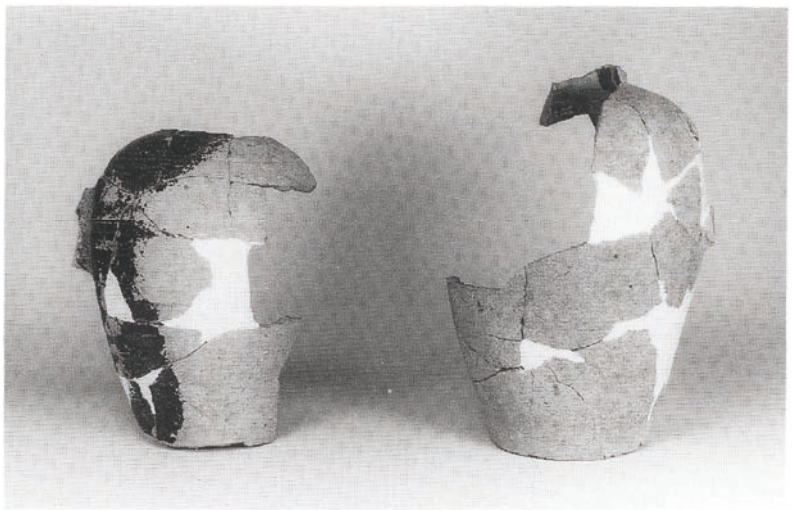


勾含層出土須恵器

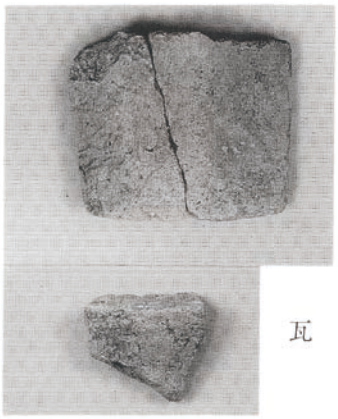
図版12





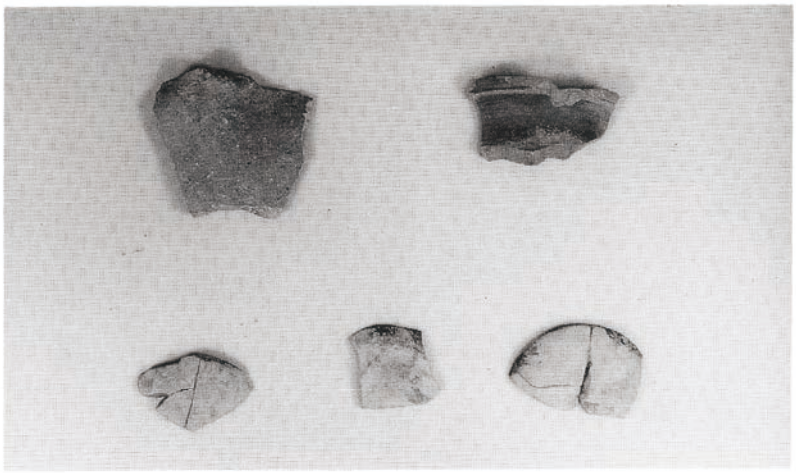


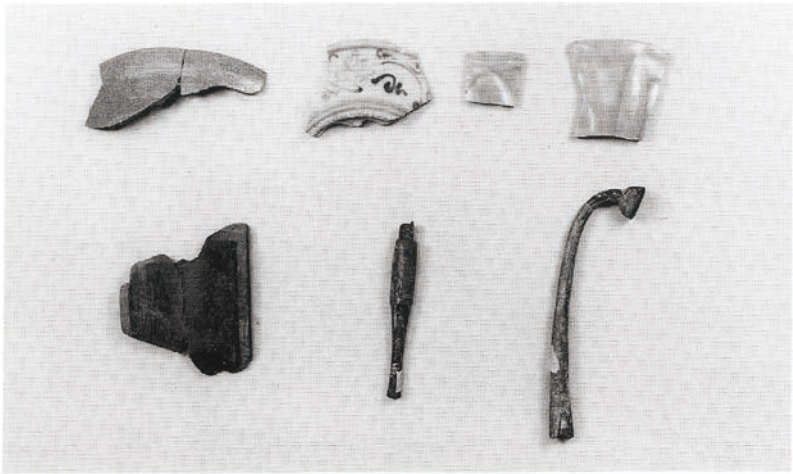
包含層出土須恵器・井戸出土土師器（最下段）



瓦

包含層出土土師器（最上段）・瓦・須恵器





包含層出土中世以降遺物

第一小学校々地内漆町遺跡
発掘調査報告書

発行者　小松市教育委員会
〒923 石川県小松市小馬出町10番地
ＴＥＬ (0761) 22-4111

発行日　1987年３月30日

印刷者　ア イ ワ 印 刷